
ロマンスは、これから

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロマンスは、これから

【Nコード】

N5072Q

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

「今日子ちゃん、大変」 大変、大変、が口癖の母から出た言葉は、

姉に関する驚くべき事実だった。 頭を抱える今日子たちの前には、

その婚約者の兄がいて、その兄と同居生活が。おまけに「媚殿」疑惑や、近所ではひったくり事件まで起こり。 女三人で穏やかに暮らしていた今日子に訪れた、嵐のような数日間。

今日子の恋と、家族の再生を描いています。

家族もの、同居ものがお好きな方、どうぞいらしてください。
完結済。自サイトでも公開中。

りんごが喉に刺さっていますか

「今日子ちゃんの喉には、りんごのかけらが刺さっているのよ」

そういえば最近彼氏とはどうなっているの、と訊いてきた姉に、実は別れることになったんだ、という話を淡々とすると、姉は静かにそう返してきたのだ。

りんごが喉に？ しかも刺さっている？

そつと左手を喉にあてごくんとつばを飲み込んだ。……大丈夫、異常なし。

「りんごが喉に刺さるわけじゃないじゃない。最近食べてもいないんだし。それに、そもそもお姉ちゃんのする話の意味がわからないんだけど」

私がそう言うのと姉はふっと笑い、「魔女のりんごよ、白雪姫」と言った。

「そのりんごのかけらがある限り、今日子ちゃんはまともな恋愛なんてできやしないんだわ。それとも今日子ちゃんにとっての本当の王子様が現れたら、簡単にとれるのかしら。……ううん。きつと一番いいのは、私が諸悪の根源を絶ちに冒険に旅立つことなんだわね」

でもねえ、うーん、と姉が唸る。

その姉の話を聞いて、私もうーんと唸る。

五つ上の姉の未来は、ハッピーエンドの童話とロマンス小説が大好きな砂糖菓子でできたような可愛い人で、妹である私もそんな姉のことが大好きなだけけど、でも、時々今みたいに、私にはわからない世界の会話が展開していくことがあった。

ちなみに、私は童話もロマンス小説も嫌いではないけれどあまり読まず、傾向としてはミステリー小説が好きだったりする。

「ともかく、いつか、絶対に、今日子ちゃんは素敵な恋ができるん

だから」

姉の話の内容ははつきりいって全くわからないながらも、それは私を励ましてくれてるんだってことは感じていたので、ありがたいの意味を込めて「うん」と頷いた。

「そうそう、笑って今日子ちゃん。今日子ちゃんの笑顔が私は一番好き」

そう言って姉は、世界で一番キュートな笑顔を私に向け、お守りだと言って小さなりんごの携帯ストラップをくれたのだった。

――「次は、はなのまち花乃町二丁目、花乃町二丁目。洋菓子店『K2』前。次は……」

バスのアナウンスにハッと目を覚まし、慌てて手を伸ばして降車ボタンを勢いよく押す。

そしてその手を下ろしながら、さりげなく口元のよだれの有無をチェックした。

……OK。

澄ました顔でどっぷりと暮れた住宅街をひたすら走るバスから降りると、バスでのアナウンス通り、目の毒としかいえないケーキ屋さんがあった。

暗い町の中で光をともしその店はやけにあたかな場所に思え、私はぶるっときた震えに慌ててコートの前ボタンを上まできゅっと掛けることになった。

三月になって、ようやくロングコートは必要なくなったけれど、だからといって完全にコートなしではいられない。

まだおせじにも、暖かいとは言えない日々だったのだ。

目の毒「K2」を横目で見ながら、お給料日がきたら絶対に寄るんだから、と気持ちも新たにした。

「K2」で、最近評判だという「黄金林檎」という名のついたアップルパイを買うのだ。

近所の友だちからのメールで知ったそれは、丸ごとのりんごが入っているのは勿論のこと、中のカスタードもおいしければ、別容器でつけてくれる生クリームもこれまたおいしくて、パイを温めてそのクリームと一緒に食べたなら至福の時が過ぎせるというものだった。

しかし、至福の時を過ごすには、やはりそれなりの対価を払わなくてはならず。

一個八百円するそれを、家族三人分買うとなると、ちょっと痛い。

来月四月でようやく社会人二年生になる（つまり、今は一年生）私には、あれこれと好きなもの好きなだけ買う十分なお金はないのだ。

家に入れるお金、貯金、昼食代、洋服代……。

世の中、お金さまさまなのである。

ふと、お店のショーウィンドウに「ひったくり注意！」の手書きのポスターが貼ってあるのに気付いた。

そうなのだ、ここ最近、うちの近所ではひったくりが多発していたのだ。

その手口は、若い女性を狙うもので、肩や手にさげたバックをバイクでひったくっていくというものだった。

しかも取られるのはバックだけでなく、携帯で電話をしながら歩いていた人は携帯だけを取られたこともあるそうで、いやはや世も末だため息が出てしまう。

ご近所で作る自警団の夜の巡回の強化と警察によるパトロールが行われていたが、今のところはまだ犯人は捕まっていない。

ああ、やだやだ、と思いながら肩からさげたバックをそのまま体

の前に持つてきて、両手で抱きしめるようにして歩きだした。

最寄駅からバスに乗り五分。

更に、バス停から五分のところに、私たちが親子が暮らす家があった。

それにしても、とさつきバスで寝てしまったときにみた夢を思い出す。

たった五分弱の夢だろうに、随分と長かった気がした。
しかも、とても懐かしい。まだ大学生だった頃の夢だ。

多分、電車に乗っているときに来たメールが、あんな夢を見せたんだと思う。

学生時代の友人からの、「今日子の元彼、結婚したよ」ってやつを。

幸せになって欲しいと思う。

それは、そう。

——と思った瞬間。

抱きしめたバックの中で携帯電話が震えるのを感じた。

それは大変なことですか

—— 今日子ちゃん、大変。

私が玄関を開けるなり、携帯のメールに打ってきた内容と同じ言葉之母は言う、次の言葉を言うか言うまいか迷う素振りを見せた。

祖母の為にと玄関に置いたベンチシートに腰をかけ、むくんだ足を苦勞してブーツから引き抜く間も、母はそれきり何も言わなかった。

恐らくいつものように、「大変」の内容を頭でまとめているところなのだろうと思い、私も母に無理に問うことはせず、そのままスリッパを履くと食堂兼リビングへと向い、自分の椅子を引いた。

キッチンからは、こんな日に食べたいと思うような、シチューのいい匂いが漂ってきていた。

ごくんとつばを飲む。

私はゆつくりとコートを脱ぐと、それを椅子の背に掛け、はじめてちらりと母の顔を見た。

母はというと、「大変」の言葉の続きをまだ探しているようだった。

やれやれと思いながら、今度は廊下を挟んで向かいにある洗面所に向い、石鹸でよく手を洗ったあと、コップに水を汲んだ。

母の「大変、大変」は、言わば彼女の専売特許で、毎日が「大変」の大安売りなのだ。

昨日の「大変」は、母の好きな俳優さんがお昼のトーク番組に出演したのを知らなかった為、録画もできず見損なったというものだった。

一昨日の「大変」は、醤油が週末に買った時よりも十円安く売っ

ていて、損をした気分になったというものだった。

そして、最近の一番の「大変」は、数年前から母が気に入ってたまに飲んでいたどこかの県地のビールが賞をとったというもので、ともかくその日はえらい騒ぎだった。

さて、今日の「大変」は一体何でしょうねえと考えながら、私はうがいを始めた。

「あの、だからね」

「ああ？」と、ガラガラとうがいをしながらの姿勢で、視線だけを母に向けた。

「お姉ちゃんが、駆け落ちしたの」

げほっと、咳き込むと、うがいの水が自分の意志に反して変なところに流れ込んでしまったような感覚になった。

「あら、大変！ 今日子ちゃん大丈夫？」

背中を摩ろうとする母を手で制し、思いっきりむせる。

「だ、だ、大丈夫じゃない！」

ようやく出た声で、叫ぶ。

駆け落ちなんて、とんでもない！ 姉の未来は、結婚を半年後に控えているのだから。

「そのこと、高原さんには、まだ言っていないよね？」

高原さんとは、姉の婚約者だ。

できたら婚約者さんの知らないうちに、姉を家に連れ戻すのがいと思われたからだ。

「そこがねえ、ちょーっと、微妙なところなのだけど」

母は、どうも歯切れが悪い。

「だからね、もしかしたら、もしかして大変じゃないかもしれないんだけど」

年甲斐もなく、母はもじもじとしながら（しかも、それがそれなりに可愛いところがシャクだ）、「あのね」と言う。

「あのね、お姉ちゃんと一緒なの、高原さん」

「え？」

「うん。だから今日子ちゃんに『大変』って言った後、迷ったのよ。これは、大変なことなのか、それともそうじゃないのか、見極めが難しくくて」

ねえ、どう思う？ と母が訊いてくる。

どう思うも、何も。

「そ、そう。高原さんと一緒かぁ。はい、まぁ。それは、うーん」
未だかつて自分の婚約者と結婚前に「駆け落ち」する人なんて聞いたことがなかったし、そもそも婚約者と「駆け落ち」って言葉が一緒に使われていいのかもわからなかった。

ともかく、姉も高原さんも立派な社会人なのだし、そもそも二人は結婚する予定なのだから、これは放っておいてもいいんじゃないかって気がした。

「そうだねえ、……うん。二人一緒なのがわかっていいるなら、とりあえず静観しようか」

姉が何を考えているのかは例によってわからないけど、高原さんが一緒なら、まぁ大丈夫だろうと思ったからだ。

今までも散々、姉の意味不明な行動に付き合ってくれた、優しく頼りになる人だから高原さんは。

「でも、お母さん。よくそんなことがわかったね。お姉ちゃんからメールでもきたの？」

そういえば、その情報源はどこなのだろうと気になった。

「あ、それ、ぼくです」

キッチンから、エプロンをした男の人が出てくると、母は明らかにほっとしたような顔になった。

「だ、ど、どなたですか？」

初めて見る男の人と、母の顔を交互に見ながらそう訊く。

「はじめまして、高原の兄です」

あ、あにい？

ほんと？ の意味を込めて母の顔を見ると、母は大きく頷いた。

「は、はぁ。高原さんのお兄様ですか。これは失礼しました、はじめまして、未来の妹の今日子です」

これは一体何が起きているんだろうと、頭の中をクエスチョンマークで一杯にしながらも、とりあえず挨拶をする。

「はじめまして。あ、シチュー出来ましたけど、食べませんか？」

高原兄の言葉に、母が嬉しそうな顔をした。

そして、私のお腹もぐうと鳴り盛大に賛成の意を示した。

「腹が減ってはなんとやらですからね、今日子さん」

そう言うと高原兄は、私に向ってほほ笑んだ。

綺麗なお母さんは好きですか

私の両親は学生結婚で、母が大学四年の時には姉がお腹の中にいたという。

そしてその五年後には私も生まれ、あまり裕福とはいえなかったものの、姉の記憶によると仲のいい家族だったということだ。

だがしかし。

その仲のいい家族に、思いの他早くエンドマークが訪れたのは、私がまだ赤ちゃんの時のこと。

結果、若い二人は別々の道を歩むことになり、母は娘二人と丁度その頃祖父を亡くして一人になった祖母の四人での生活をスタートさせたのでした、合掌。

まあそれでも、私は自分が特別不幸だとも思わなかったし、女四人での暮らしをそれなりに受け入れていた。

砂糖菓子のような姉だが高校卒業後の進路を決めるときには、「私はお母さんのお腹の中で、大学の授業は履修済みだから」と進学はせずに働きました。

今思えば、もしかしたら家の経済状況の為だったのかなあ、と思わないではない。

姉よりも五つ下だった私は（恐らく姉の援助もあり。誰もそこらへんのことは教えてくれないけど）大学へと進学した。

そして卒業後は、幸運にもその大学の付属高校で事務職に就くことができた（女性も定年まで働けるいい職場だ）、こうして現在に至るというわけだ。

姉は名の通った会社で受付の仕事をし、そこで高原さんと知り合った。

その高原さんも肉親との縁は薄く、早くにご両親を亡くされているとは聞いてはいたが、兄がいたとは、私は今の今まで知らなかった。

た。

高原兄の作ったシチューは、鶏肉や蕪かぶやニンジンが入った、優しい味のものだった。

私はそれをずりずりと食べながら、正面に座る高原兄のことを観察した。

これですべてもハンサムとか、影のある人物だったら面白みのあったものの、高原兄はどこにでもいそうな顔で、背の高さだって特別高くもなければ低くもない、太ってもいなければ痩せてもいない、人に紹介する時に最も困る風貌をしていた。

まあ、私だって同じようなものなので、人の事は言えないけれど。

なので、下手に口からそんな感想が出ないようにと、ひらすら食しょくに集中した。

いい具合にとろけている蕪を口に入れた時、「似ていませんね」と高原兄が私を見て言った。

「はふ？」と、意味不明な言葉で訊き返すと、「未来さんとは」と高原兄がそう続けた。

「まあ、そうかしら？ 二人とも、私が生んだんですけど」ほほほ、と母が笑うと、「お母さんは、お綺麗ですね」と高原兄が言った。

まあ嬉しいわ、なんて母は喜んでいる。

熱い蕪を、ごくんと飲み込む。

——「お母さんは、お綺麗ですね」ときたか。は、と。

それってつまり、私が今一つであるってことを言いたいのだろうか、この高原兄は。

しかも、シチューを食べながら。

更に言わせてもらえば、不用意に独り者の中年女性を甘い言葉で惑わすなっているの。

……まあ、母が綺麗なのは否めないことではありますが。

離婚後母は、駅前の不動産屋で働いて、「不動産屋小町」として（子持ち、離婚歴ありだが）店の賃貸契約件数向上に貢献しているわけだし。

そんな母だから、娘としては褒められるのは嬉しくはあるのだが、妙齡の娘としてはそれはあまり面白くはないので、ふん、と思いパンを歯でぐいっと食いちぎった。

人間、顔じゃねえだろうと。（つーか、私だってそこまで悪くはないでしょうよ、と）

だから、むしゃむしゃとパンを咀嚼しながら「お兄様も、似てないですね。高原さんと」、と口角をきゅっと上げ、にたあと笑い私と言ってやった。

「よく言われます」

高原兄はそう言うのと、私と同じように口角を上げて、にたあと笑った。

そんな顔を見て、無性に腹が立った。

だいたい、高原さんのお兄さんってことは、三十才は超えているはずだ。

……この人、大人げない。

それに、そんないい年をした人が初めて訪問した家で、いきなりシチューなんか作るだろうか。

確かにおいしいけれど、さっきはお腹が空いていてそこらへんを全て曖昧にしたけれど。変だ、すつごく変。

それに、母は高原兄を知っていたのだろうか。

そんな話は、聞いたことはない。

「仔犬みたいです」

高原兄が私のことをそう母に言う。

仔犬？ キャンキャン吠えるってことかい。

「あら、お目が高い。今日子は、うちのマスコット兼番犬なんですよ」

ほほほほ、と笑う母をじろりと睨む。

「コホン。ええと、で、そうそう、私、吠えたがりの番犬なんですよ、あなたが、あなたのこと本当に高原さんのお兄様だって証明する何かってありますか」

お腹が膨れてきたので、元氣を取り戻しそう訊く。

すると、「あなたが、この家の娘さんだって証明はできるんですか」と高原兄は返してきた。

高原兄の言葉に、私は目をまん丸くして母を見た。

「お、お、お母さん。この人、なんなの！」

「今日子ちゃん、落ち着いて。まずはあなたでしょ。あなたが先に高原さんに失礼なことを言ったのでしょ」

母にたしなめられ、うっと言葉に詰まる。

「本当に、高原さんのお兄様なのよ。今日子ちゃんには話していなかったけれど、長いこと他県で暮らされていて」

お忙しかったんですね、と母が言うところ今度は高原兄が気まずそうな顔で、「まあ」と答えた。

ふふん、といった顔で私が高原兄を見ると、高原兄は片方の眉をきゅっと上げて私を見た。

「春匡さんはるのみっておっしゃるのよ」ねえ、と母が高原兄にほほ笑むと、高原兄も母に向ってほほ笑んでいた。

馴染んでいるし！

いろいろと言いたいことはあったけれど、私が何か言うことでこれ以上母に小言を言わせるものなんなので、変なことを口走らない防御策として、私は慌ててシチューをすくうと口に入れた。

そこで、はたと気づく。

「ところで、一体姉たちに何があったんですか！」

私の口の中から、人参のかけらが飛び出した。

ロマンスがない人生なんて淋しいですか

「つまりですねえ」

食後のコーヒーを飲みながら、ようやく本題へと話はなった。
姉と高原さんの駆け落ちについてだ。

「ロマンス、だそうで」

「ろ、ろまんすう」私と母の声が揃う。

ろまんすって、つまりがロマンスで、あの恋とか愛とかってやつですか、と訊くと「ええ、そのロマンスだそうです」と高原兄は冷たいものを取りすぎたかのように、眉間に指を当てながら言った。
聞いているこっちも、歯痛をおこしそうな単語だった。

ごく普通の生活を営む日本人には、こんな場でしかも素面で聞くには「愛している」の次に痛い単語かもしれない。

「未来さんは、『ロマンスがない人生なんて淋しすぎる』と叫ぶと一人で冬のマンションを出て行こうとしたのです」

「……はあ」

「はい。それで、それを聞いた冬が、あ、僕は弟の冬匡ふゆおみのことを冬って呼ぶんですが、冬が、『一緒に行く』、と言いだして」

「ちよつと、ま、ま、待って下さい。あの、お兄様はまるでその場において、全てを見ていたかのようにお話しされますけど」私はそう言っていると、「ええ、そうなんですよ。いたんですよ。実際、その場に」と高原兄はなんともいえない表情をした。

この人、その場にいたわけ！

「ああ、そこから話しますか。僕はあちらでの仕事に区切りがつきましたので、こうして上京したわけですが、当然まだ住む家はないんで冬のマンションに行ったわけですよ。そうしたら、まさに修羅場っていうんですか、男女の感情がもつれまくった状況に足を突っ

込んでしまいました」

「まあ、それは難儀でしたわねえ」

「はあ、ともかく驚きました。正直、そのまま回れ右をしてどこかに逃げようかと思いましたが。……しかし、まあ、色々ともそういうわけにもいかず」

高原兄の言葉に、そうでしょう、そうでしょうと母は大きく頷く。

「ええ、ええ、春匡さんがいてくださったからこそ、こうして私たちも二人の駆け落ちについての経緯^{いきさつ}を知ることができたんですわ」
ありがとうございます、と母は高原兄にお礼を言っている。

ちよつと待って！

「ねえねえ、結婚を約束した二人に『駆け落ち』って言葉は、ないんじゃないかな。つまりが、そうよ……旅行。旅行ってことでいいんじゃないの」

ずっと思っていた疑問を、二人にぶつけた。

「旅行、ですか。……そうですね、今日子さんがそう呼びたいのなら、そう呼びますか」

いかにも気が進まないといった感じで、高原兄がそう返してきた。

「ま、待って、待ってよ。なんかその言い方って嫌な感じじゃない。私がどう思いかじゃなくて、一般的によ。ねえ、よく考えてみて。

変じゃない、変でしょ、その言葉は。だって、駆け落ちって、結婚を反対されている二人がするものでしょ。でも、あの二人の結婚には誰も反対していないわけで。……つまり、そうよ！ 『駆け落ち』なんて言葉、そもそも誰が最初に使ったわけ？」

私はそう言って高原兄に食ってかかった。

すると高原兄は少し迷った挙句、「その言葉を最初に使ったのは未来さんなんです」と言いにくそうにしながらも、そう言った。

「え、お姉ちゃんが」

確かに、使いそうだ！

「ええ」

「そうですか。それは……すみません。どうぞ、続けてください」

「ああ、はい。それでお姉さんは、未来さんは僕に、『長い人生なんだから、少しくらいロマンチックなことがあってもいい。むしろ今まで全くなかったんだから。今からだって遅くはないんだから。だから私は行きます。で、妹には姉は駆け落ちって伝えてください』と」

高原さんに年の数だけの薔薇を誕生日にねだったり、自分のことをハニーと呼ばせたりしている姉が、どの口で「少しくらいロマンチックなことがあってもいい」などと、ふざけたことを言うのだろうか。

私は心の中で、高原さんに深く頭を下げた。

「そ、それで。あの、お兄様はなんと」

「あのさ、今日子ちゃん」

今日子ちゃん、ですと。

「さっきから気になっていたんだけど、できたら『様』はやめて欲しいなあと。『お兄様』って呼ばれるのはちよつとキツイというか」

キツイ？ 一応気を使って、「様」を使っていました。

「では、お兄さんで」どうでしょう、と訊くと「はいはい、よろしく、今日子ちゃん」と高原兄は言い、私たちの間での呼び名は「お兄さん」と「今日子ちゃん」として決まった。いや、こんなこと決まらなくてもよかったんだけど。

「ええと、未来さんの言葉を聞いてですよね……はい、その言葉を聞いてですね、ぼくはさつと考えましたよ。式も披露宴もまだ半年先、ということはキャンセル料金はかからないのではないだろうか、と。それにそもそも結婚する二人なのだからそれは駆け落ちだろうが、階段落ちだろうが半落ちだろうが、なんでもいいだろうと」

「階段落ちって、半落ちって、お兄さん、映画じゃないんですから」

「ああ、ご存知ですか？ お若いのに感心ですね」

「映画に、若いものにもないと思いますけど。っていうか、そもそも、映画は関係ないと思います！」

「関係ないって。しかし、映画と言う単語を最初に使ったのは、今日子ちゃんですよ」

「そ、そうですけど。ああ、すみませんでしたね！ で、お姉——」
と私が言ったところで、外から「キャー！」という叫び声が聞こえた。

えええ？ と、私は母と見つめう。

すると、次の瞬間。

高原兄が目にもとまらぬ速さで椅子から立ち上がると、勢いよく外へと飛び出して行った。

そんな姿を、私と母はまるで未知の星からやってきた宇宙人を見るかのような思いで見っていた。

番犬はいりませんか

「これで今月五件目だそうですよ」

しばらく経って外から帰ってきた高原兄は、冷たい外気を体中に漂わせながら、立ったままで今あったことを話してくれた。

私は温かいコーヒーを入れ直し、高原兄に渡した。

高原兄は目を細めて、「ありがとう」と言った。

あの叫び声は、ひったくりされそうになった女性のものだったらしい。

今回は、女性の声も大きく、たまたま近くに他の通行人もいた為（しかも高原兄以外にもその場に駆け付けた人もいたそう）ひったくりは未遂で終わったそう。

高原兄は犯人を追いかけたけれど、相手はやはりバイクだった為に追いつけなかったそう。

おまけに、他の目撃者の話だとナンバープレートは汚れていた（泥がついていた？）ということだった。

よく小説やドラマで、犯罪目的で使う車やバイクのナンバープレートがそれを読まれないようにと泥まみれであるというのは知ってはいったが。

これはそういったノンフィクションでなく、自分たちが住むすぐそばで起きた本当の事件なのだと思うと、その生々しさに震えがきた。

「そういえば、お隣に空き巣も入ったのよね」

ありがたいことにその犯人はすぐに捕まったのだけれど。

「なんだか物騒な世の中になったわ、怖いわねえ」と母が不安顔で嘆く。

確かに、こんな時ばかりは女所帯だと心細い。

「――わかりました」

高原兄の強い口調に、椅子に座っていた私と母は揃って彼を見上げた。

「しばらく、僕がこちらで番犬になります」

「は？」

「あ、番犬は既にいましたか。なら、そうですね、ボディガードってことで、こちらに住まわせていただきます」

ボディガード？

「まあ、嬉しい！ それは心強いですわ。でも、いいのかしら」

「ええ、勿論です。弟の相手のご家族に何かあったら大変ですから」

私の目の前で、どんどんとコトが進んでいく。

「ちょっと待ってよ！」

「あら、ありがたいことじゃない。そうそう、春匡さんには、一階の和室を使っていたきましよう。ねえ」

こりゃ母じゃダメだと思い、じろりと高原兄を睨むと、本人は涼しい顔をしている。気に入らない。

「お母さん。騙されちゃダメ。この人、単に住む家がないからって、うちに暮らそうとしているのかもしれないし」

「今日子！ また、あなたは失礼なことを」

「だって」

「それに、『この人』だなんて他人行儀な。高原さんと未来が駆け落ちしちゃったんだから、もう春匡さんはうちの家族も同然よ」ねえ春匡さん、と母が言う。

「……家族同然と、家族とは違うと思う」二人して同盟を結んだかのような仲の良さに、カチンときた。

「今日子は、またそんなこと言って。本当は一番の怖がりのくせして。バス停からだって本当は歩くの怖いんですよ。おばあちゃんも亡くなってしまったし、お姉ちゃんもいないし、二人だちょっと

お母さん不安だし」

母にそう言われると、私は何も言えなくなってしまう。

母の離婚以来一緒に暮らしていた祖母は、去年の八月に亡くなった。

一人減っただけでも、家のがらんと感じたものだ。

そして、今。絶賛駆け落ち中で、姉もいない。

「うーん。でも……そうよ、食費！ 食費は入れてよね。それくらいはいいわよね、ええと、そうね、五千円よっ！」

私がそう言うのと高原兄はぽかんとした顔をして、「五千円はいくらなんでも少ないですから、二万円をお願いします」と言ったあと、「今日子ちゃんは、本当は面倒見がいいんですね」と母に向ってほほ笑んでいた。

私に向ってほほ笑めば、変顔へんがおでもして応戦できたものを、母に向って言うあたりが年寄りのいらやしさを感じてしまう。

自室に戻ってコートをハンガーに掛けた。

これは、私の就職祝いにと姉がプレゼントしてくれたものだ。

——お姉ちゃんは、高原さんとの二人きりの結婚式がしたかったのだろうか。

私たち抜きの。

自分が思うよりも、姉の花嫁姿を楽しみにしていたんだなあと気がついた私は、少し淋しい気持ちになってしまった。

婿殿とは誰ですか

少し腫れた目で食堂に行くと、食卓には二人分の朝食の用意がしてあった。

しかも、我が家の朝食で見たことがないメニュー。

食卓についていいものなのかどうかと、うろろうとしていたところ、カランカランと玄関のベルが鳴りぺたぺたとスリッパを履いた母が新聞を持ってやってきた。

「あら、今日子ちゃん、おはよう」

「おはよう」これ私とお母さんの分なの？ と訊くと母が頷いたので、「あの人はまだ寝てるのね」と私は言った。

保温ポットから急須にお湯を入れる。

「今日子ちゃん、あの人じゃないでしょ。春匡さんでしょ」

ちゃんとお名前を呼ばないと、母はそう言うとお味噌汁をよそった。

母が席につくのを待ってから二人でいただきますをし、朝食を食べだした。

「春匡、ねえ」

誰が呼ぶか、という意味を込めてそうつぶやく。

下の名前で呼ぶほど親しくなる予定もなければ、そんな希望も私にはなかったから。

「もう、呼び捨てにしないの。年上の人に対して失礼ですよ。それに、春匡さんならとくに起きて朝食も済ませて、走っています」

意外な答えに、箸を持つ手が止まった。

「へえ。……健康的だね」

「そうなの、朝から爽やかで。おまけに、早くから営業しているスーパーに行ってわざわざ食材を買ってきて、朝食まで作ってくれて

特に、今朝のメニューは今日子ちゃんの為にって言っていたわよ」
「私の為？」

ちなみに、高原兄の作ってくれた朝食は、やたらと野菜の入った
お味噌汁、メザシ、卵焼き、湯豆腐、そしてひじきと油揚げと人参
の入った炊き込みご飯だった。

「ふーん。そう。ひじきかなあ、鉄分不足とか？」

お茶碗から箸でひじきだけをつまむと、わざとらしくそれを口に
運んだ。

「ううん、違うの。メザシ。お嬢さんには、カルシウムが足りない
って」

鉄分じゃなくて、カルシウム。

箸を持つ指をじっと眺め、「もしかして、華奢ってことかしらあ
と言う。」

「ううん。怒りっぽいって」

母はそう言うのと、「あ、おいしい」とお味噌汁を飲んだ。

怒りっぽい、ですって。この冷静な私に対して。

「絶対におかしい、あの人」と私が言うのと、春匡さんでしょ、と母
が訂正をしてきた。

「ともかく、春匡さんが帰ってきたら朝食のお礼を言うのよ」

「怒りっぽくてごめんねえって言っとく」

「もう、今日子ちゃんってば、どうしちゃたの」

昨日からカリカリしちゃって、と母は心配そうな顔をしてきた。
いかん、いかん。

「あ、ええと。今日も仕事だよね」

不動産屋は、週末が稼ぎ時だから。

「うん、学生さんでまだ下宿が決まっていない人が何人かいるのよ
ね」母はそう言うのと心底心配した顔をした。

善良だなあ。

「だから、お昼にお母さんはいないけど、自分で何か作って食べる
のよ」と母が言う。

「了解、了解」そう答えながら、私はキッチンに置いてあるお菓子ボックスに入ったポテトチップスを思い浮かべた。

「スナック類は禁止よ」

私の心の中をどんぴしゃりと言いついてた母に、驚きの目を向ける。

「今日子ちゃんって、ご飯の代わりにすぐお菓子で済まそうとするから心配で。でもね、ダメよ。お菓子をナンバリングしたから、どれを食べてもばれちゃうんだからね」母がそんなことを言ってきた。

「いやあ、まめですねえ」

白旗の意味も込めて、母にそう返す。

「あら、私じゃないわよ。春匡さん。私が今日子のことと相談したら、そんな案をくれて」

「……ふーん」

また余計な知恵を、とぐるるると心の中で唸りながら私は怒りをメザシにぶつけ、まるで敵かたきのようにそれらを食べた。

母が高原兄に家の鍵を持たせたと聞いたので、私は心おきなく近所の森林公園へと向かった。

日頃の運動不足を自覚しているので、週末くらいはと思いウォーキングをしているのだ。

途中で隣の家のおばさんに声を掛けられたりなど、なかなか私も地域に密着した生活をしているもんだなあと思った。

まあ、産まれたときからあの家にいるわけだから。

良くも悪くも、思い出は多い。

公園までてくてくと歩くと、森林公園入り口にある小さな広場にウォーキング仲間である近所のおじさま（おじいさま）たちの姿を

見つけた。

おじさまの一人が私に気がつき、「今日子ちゃん」と手を振ってきたので私も手を振り返すと、そのおじさまの隣にいた御仁が振りかえった。

神出鬼没の高原兄だった。

「今日子ちゃん、今日子ちゃん」

おじさまたちにウエルカムで迎えられた私は、高原兄にぺこりと頭を下げると、さりげなく彼から一番遠い場所に立った。

「今日子ちゃん、助かるよお。婿殿が、夜の自警団に参加してくれるっていうじゃない」

「……ムコドノ」ああ、婿殿か。

「高原さんが」

あれ、いつのまに高原さんがそんなことをするって言ったんだろうと首を捻る。

それにもしそう約束したとしても、只今高原さんは姉と絶賛駆け落ち続行中なわけだから、気持ちはあるっても実質無理だろう。

「ああ、でも、それはちよつと」

難しいんじゃないのかなあという意味でそう返すと、「おいおい、今日子ちゃん。そりゃないよ。せっかく若い人が参加してくれるって喜んでいたのに」と違うおじさまが言う。

そして「ねえ、婿殿」と、高原兄に向ってそう言った。

おや。

……もしや。

「ち、違いますよ!」

「ああ、そうだよね。今日子ちゃんがそんないけずなこと言うわけないもんねえ」きつと婿殿から離れたくないんだね、そう言うとおじさまは、「愛されてるねえ」と高原兄の背中をたたいた。

すると、どうしたとか、頭をかくなんて古典的な照れの動作を、

高原兄がするではないか！

「ちよつと、あなた」

「うああ、『あなたあゝん』だって、お熱いね今日子ちゃん」
待て待て、「あなたあゝん」なんて言っていないでしようが！

「いや、だから、そうじゃなくて」

「おっ！ そろそろ時間だぞ、じゃ、歩こうか！」

はいよお！ っておじさまたちは声を揃えると、ザクザクと歩きだした。

高原兄はそんなおじさまがたに手を振っている。

「お、覚えておきなさいよお」

手を振る高原兄の横を通り過ぎながら、私は安い映画の捨て台詞のようにそう言った。

子どもは好きですか

一度、高原兄のことを「婿殿」と認識してしまったおじさまがたに、それは誤解なんだと理解させることは今日の時点では無理だった。

そんな、主に精神的な疲れでよろよろと家に戻ると、デジャヴュのような高原兄のエプロン姿があった。

なんだかなあと思いながら、手を洗って台所に行き、スナック菓子を入れてある箱に手を伸ばし――ナンバリングされているポテトチップスを見て慌ててその箱をもとに戻した。

そうであった。母がスナック菓子のナンバリングをしていたのだった。婿殿騒動で、すっかり忘れていた。

仕方がないので、冷蔵庫からプラスチックのポットに入った水だし緑茶を出すと、コップに注ぎ一気に飲んだ。

すると、さっきまで火照っていた体が一気に冷えた。

「着替えないと。汗をかいたまましていると、風邪を引きますよ」

お母さんの発言の高原兄を無視して食卓につき、側にあったフリーペーパーを広げた。

それは母の働く不動産屋に置かれているもので、時折古くなったそれを母は自宅に持ちかえってきていたのだ。

今回の特集は「全国のおいしいあんぱん」だった。

すきっ腹には目の毒なそれを捲りながら、さて、どのタイミングで高原兄に婿殿のことで文句を言おうかと考えていた。

いや、文句を言うよりも先に何かお腹に入れないか、と思った。腹が減ってはなんとやら。文句を言うのもエネルギーがあるのである、と思った時。

「それに、風邪を引くだけじゃなくて、汗臭いしね」と高原兄の声が出た。

ん、汗臭い？ あんぱんの記事から顔をぱっと上げ、高原兄と睨

み合う。

いや、正確に言うとは相手はこっちを見て笑っていたわけだから、睨んだのは私だけ。睨み合っていない。

「さあて。ああ、そうだ。着替えてこようかなあ」

さりげない振りを装い、すつと席を立つ。

「シャワーも浴びてくださいね」

またまた余計なお世話な高原兄の言葉をぐっと我慢すると、私はどすどすと足音を立て部屋から出ていった。

——そして。

「いただきます」

「はい、どうぞ」

結果を言えば、シャワーを浴び服も着替えすっきりとした私は、またまた高原兄の作ったご飯をいただくことになったのだ。

高原兄の作った昼食は、ニンニクがとても効いたキノコやお野菜がたっぷりに入ったパスタだった。

ちなみにデザートはバナナ。センサー、バナナはおやつに含まれますかあーと言いたくなる。

それにしてもこのパスタ。醤油味というのが、ニクイところだ。食が進む。

ふと視線を感じて顔を上げると、高原兄がにこにこしながら私を見ていた。

……もしや、がつつきすぎただろうか。

フォークにとっていたパスタの量を減らし、開ける口も心持ち小さめにしてぱくりと食べると、今度は、声を押し殺したような笑い声が聞こえた。

「や、ごめん、ごめん。おいしそうに食べるなあと思って」

「どんどん食べてね、と高原兄が言う。」

笑いのつばに入ったのか、単に笑いじょうごなのか、「ごめん」と言いながら高原兄は腹筋を押さえている。

……大袈裟なっ。

「だって、おいしいし」

嘘をつく理由もないので私がそう言うのと、今度は高原兄が少し驚いたような顔でこっちを見てきた。

「なんでしようか」

結局、口いっぱいパスタを放り込むことにした私は、もぐもぐとさせながらそう訊いた。

「いや」、わざとらしく高原兄は咳をコホンをする。「なんでもない」と言っパスタを食べだし、「確かに、おいしい」と言ったので、私は高原兄の十八番の片方眉上げおはこをして「でしょ」と言った。

私が昼食の食器を洗い終わった途端、まるでそれを見ていたかのように玄関の呼び鈴がなった。

宅配だろうかとインターフォンに出ると、その小さな画面には顔は見たことはあるが名前は一致しない近所のちびっこたちがずらりと並んでいた。

「今日って、ハロウインの日じゃないですよね」

高原兄に確認すると「違うねえ」という返事が返ってきたので、私は「お菓子は不要」とつぶやきながら玄関の扉を開けた。

すると、「おじゃまします!」と元気のいい声ともに、「婿殿先生ってどこお?」と言いながら子どもたちが家のあちこちの扉を開けだした。

その「婿殿」の言葉で、そういえばそのことについて高原兄を追求していなかったことを思い出し、もしや高原兄がさっき笑っていたのって、このことだったのか、と思った。

「覚えておきなさいよお」なんて捨て台詞を言いながら、このザマですよ。ああ。

しかし、今はそんなことよりも、カマキリの卵から孵ったかのご

とく元気な目の前のお子さまたちだが問題だ。

これは一体何かの悪夢だろうかと怯みながらも、「ちょっと、あなたたち!」と叫びながら子どもたちの後を追った。

食堂兼リビングについた子どもたちが「あ、婿殿先生?」と高原兄に訊くと、高原兄は苦笑いしながら「たぶん、ぼくのことなんだろうなあ」と言った。

認めるな、そこで。

ぎゃいぎゃいと騒ぐ子どもたちを高原兄は自分が使っている和室に連れて行くと、一人に一枚座布団を渡し（子どもは五人いた）座らせた。

そして手際よく子どもたちに勉強の用意をさせると、「ひらがな」と「カタカナ」を文字を教え始めた。

みな、思い思いのドリルを持参していて、聞くと揃ってこの春から小学一年生になるのだという。

「でも、だからって、なんで私が」

割合と静かに勉強をする子どもたちの様子を感じながら、私はその子たちの為にジュースとお菓子の用意をしていた。

これらは、子どもたちが親御さんに持たされたものらしい。

——「いや、実はね」

あの公園の広場で、高原兄はどういう訳だか、おじさま方の孫に勉強を教える約束をとりつけられてしまったらしい。

そんなことよりも、婿殿の誤解を解きなさいっていうのよ。

この人、押しに弱いんだわ。

将来は押しかけ女房にやられるね、といらぬ心配までしてしまった。

そして、勉強を始めてからもうすぐ四十五分。

高原兄から、だいたいその頃におやつを用意してくれると助かると言われていたのだ。

断りたい気持ちで一杯だったけれど、昨日の夕飯から今日の昼食まですっかり高原兄のお世話になっていている私には、それを無下に断るなんてことは出来なかったのだ。

よって、大人しくもその指示通りに動こうとしていたのでありました。……はあ。

背の低いガラスのコップにジュースを注ぎ、お皿二枚にお菓子を分けたものをお盆に載せると、「はいはい、休憩ですよ」と言いながら襖を開けた。

この和室は祖母が使っていた。

それが今では部屋の片隅には高原兄の荷物が置かれ、更には子どもたちが勉強なんかしていた。

和室を開けた時に見える光景のあまりの違いに、私は入り口で立ちすくんでしまった。

しかしそんなことにはお構いなしに、静かだった部屋はおやつが来たことでハチが飛び交うような騒ぎになった。

その賑やかさに背中を押されるように私は部屋の中へと進み、子どもたちがそくさと勉強道具を片づけた机の上にそれらを並べた。

高原兄が子どもたちに手を洗ってくるように、と指示を出した。

我先にと、競うようにして子どもたちは洗面所へと向かった。

「はい、センセイ」

高原兄の前に、コーヒーを置く。

「大サービスだね」高原兄は片眉を上げると、「ありがとう」と私に言った。

その時初めて、この人の眉毛は綺麗かもしれない、と思った。

お手入れしているとかじゃなくて、いい眉毛をしていると。結構好きだなあ、と。

そんなことを思いながら、いつから私は眉毛フェチになったんだと、自分に突っ込みをいれた。

その後も、子どもたちは思いの他しっかりと勉強（というか書きとり？）をし、最後にもう一度おやつを食べた後、来た時と同じようにわいわいと帰っていった。

玄関まで子どもたちを送って戻ってきた高原兄は、何をしたというわけでもないのにダウン気味の私の頭をポンとたたくと「ごくろうさま」と言った。

その高原兄の手のあたたかさに、私は、なんとも言えない気持ちになってしまった。

家の中は、子どもたちの匂いがまだ残っていた。

「乳臭い」という言葉があるけれど、あの子たちが家に入った途端、まさにうわっとそんな匂いがしたのだ。

小さな生き物の、微かな匂い。

そして、そんな子どもたちを、まるで魔法使いのようにさっと手懷けた高原兄。

がみがみ怒るわけでもなく、ほったらかしにするでもなく、子どもたちの間に入って動いていた。

そんな彼らの姿は、私に見たこともない風景を想像させるものでもあった。

小さな子と、大人の男の人。

それは、私の記憶にはない世界だった。

りんごのかけらは見つかりましたか

ぼんやりとしていた私に、高原兄がいつの間にかいれてくれた紅茶を渡してきた。

両手でそれを受け取りながら、ミルクも砂糖も入ったそれをゆつくりと飲んだ。

高原兄は椅子に座らずに、机にもたれかかるようにして私の側にいた。

「勉強なんてさ」

「うん」

「あの子たちの親がみればいいのに」

私がそう言うとき高原兄は、「親だけがみればいいのかな」と言った。

「だって、自分の子どもなんだから、自分で面倒をみるのが当たり前じゃない」と私が言うとき、「そう。自分の子ども以外の子の面倒はみなくてもいいと思うんだ」と訊いてきた。

「そういうものでしょ」

そう言いながら、実のところ私だって勉強は母でなく姉にみてもらったりしていたのだけれど。

「そうか。ぼくは、手が空いている人が見ればいいと思うけどなあ」

高原兄はそう言うとき、紅茶を飲んだ。

その危機感の無い態度に、もやもやとしたものを感じた。

「手が空いている人って、つまりが、あなたが、いいように使われたってことでしょ！」

あっ。しまった、と思ったが後の祭り。でも、もう止まらない。

「そ、そんなんだと、なんでもいいように押し切られちゃうんだか

らっ。今回のことだって、それにお姉ちゃんのことにしたって、いわばあなたは被害者であって、巻き込まれなくてもいい面倒に巻き込まれて。うちにまで来て」

そう自分で話しながら、言っていることがなんだか訳がわからなくなってきた。

「ああ、そっか。うん、うん。そうか。今日子ちゃんは、ぼくのことを心配してくれているんだ」

高原兄が、そんな珍妙なことを言ってきた。

……そう、珍妙なはずなんだけど。

「そんな、わけないでしょ」と、答える声が我ながら小さいのがわかった。

心配？

「違う、心配なんかしてない。私は、そんなお母さんみたいには、善良じゃない」

首を振って、高原兄の意見に反対をした。

すると高原兄は、「お母さんって、今日子ちゃんのお母さんのことだよ」と訊いてきた。

「そう。うちの母です。母は、駅前の不動産会社で働いていて、この時期だと学生さんの下宿先も最終段階で。でも、なかなか希望する賃料の物件が見つからない人がいて、そうなるともう、自分のことみたいに心配して。ほんと、お人よしで」

「お人よしなあ」高原兄はそう言うと、「でも、自分以外の人のことの心配をするのは、この家の人たちみんななんじゃないのかな」と続けた。

手の中の紅茶のカップに視線を落とす。

——自分以外の人のことの心配。

確かに、母はそうだ。

それに、今は駆け落ちなんて物騒な真似をしている姉だって。

カップを置き、机の上に置いてあった携帯電話を高原兄に見せる。

「このストラップね、姉がくれたの。私にとって」

ぶらっと揺れる小さなりんごを見て、「可愛いね」と高原兄が言う。

「姉の手作り。一時期こういうのを作るのに凝っていて、いろんな人にあげていたみたいけど」

そして、どうして姉がこれくれたのかまで、危うくしゃべってしまいそうになった自分に驚く。

「……つまりが、幸運のお守りだって」

かろうじて押しとどめた言葉の代わりに、嘘ではないけれど、当たり障りのない説明をした。

「そうか」

そうするうちに――そのりんごのストラップを見ているうちに、段々と気持ちが落ち着いてきたのがわかった。

そして、さっき高原兄に言ったことは、自分が高原兄と子どもたちの存在に動揺してしまったから言ってしまったことで、つまりが八つ当たりだったことを謝らないといけないと思った。

言えるか、言えないか。

「……生意気言ってごめんなさい」

―― 言えたあ！

「いいように使われた、なんて言って」

そう、謝ってしまえば、どうってことないことなのだ。

すると高原兄は、「いや、そんな」と言った後「謝ってもらったなんてないのに」と続けた。

私がそっと高原兄を見上げると、高原兄も私の顔をじっと見て、「今日子ちゃんは、彼がいるの」と訊いてきた。

彼。即ち、恋人か。

「……。いたら、こんな天気の良い土曜日に、おじさまたちとウォーキングはしてないと思います」

どうせここで見栄を張ったところで、姉ルートでばれる可能性があるるので正直に言う。

すると高原兄は、「そっか、ごめん」と素直に謝ってきた。

へえ、と思った。

なんというか、意外と男の人って謝らないって印象があっただけに（私の数少ない経験だけけど）、ちょっと驚いた。

仕事の場でも、こっちに非があったと言っては怒ってくるものの、いざ自分に非があっても謝らないで済ますおじさま方が多かったからだ。

高原兄にしてみても、私なんて学生に毛が生えたようなお子さまだと思えたし、そんな年下相手にも直ぐに謝れる人っているんだなあ、と新鮮な気持ちになった。

「今日子ちゃん」と高原兄は私の名を呼ぶと、「いろいろと氣をつけてね」と言ってきた。

「はあ」

氣をつけて、とはどういう意味なのだろう。

不思議そうな私の顔を見て、高原兄は「うーん」と唸った。

なので私も、「あの、それは、どういう意味でしょう」と訊いてみた。

しかし、尚も高原兄は歯切れが悪く、うーんと唸っている。

そういった態度、余計に氣になるでしょ。

「あの。言いたいことがあるのなら、はっきりと言ってください！」

つい何十秒か前に「生意氣言ってごめんなさい」なんて謝った私が、またもや高原兄に食ってかかるところがミソだ。

「ああ、そうだね。はっきりと言った方が、その方が親切だよね」

と高原兄が答えた。

そして、「うん、じゃ、正直に言うかね」と高原兄が話しだす。
高原兄の真面目な口調に妙に緊張してきた。

「あのね、外での今日子ちゃんがどうかはわからないけれど、この家での様子を見るかぎりね」

「はいっ」元氣よく合の手を入れる。

「……やっぱり、言うのやめます」

「えっ、えー！」

気になるから言うてよお！ と、じたばたと騒ぐ。

「ああ、うん、つまり」高原兄が今度は私から視線を離して話し出す。

「今日子ちゃんには、人類は男と女がいるってことを自覚して欲しいと、お兄さんは思いました」と言った。

その言葉に、自分の目が糸目になるのを感じた。

「そんなの、わかってますけどお」

まあ、確かにうちには女しかいませんでしたけどね。

私だって人として生活をしているんですから、老若男女すべてからくみな知っていますよ。

「うーん、今日子ちゃんの言う『わかっている』と、ぼくの言うのとは、違うんだなあ」

「どう違うんですか」

「あのね、さっきみたいだね」

「はいっ」

「……その、ちょっとの間、相槌なして聞いてもらっていいかな」
「はいっ」

「ああ、そう。人の話を聞いているのかなあ、この子は。で、その、さっき今日子ちゃんは『生意気言ってごめんなさい』って言ったでしょ」

「は——」はい、と相槌を打ちそうになったのをぐっと我慢して、云々と頷く。

「そういうこと言われるとですね、言われた男としてはやられちゃうわけですよ」

やられる。やられるとは、これまた物騒な。

眉間に皺が寄った私を、そうだよねえわからないよね、ってな顔で高原兄が見た。

「だから、仔犬みたいって思ったのかな。人の気も知らずに無邪気に尻尾を振って。ほんと、まだ仔犬だよなあ」ああ、マスコットだっけ、と高原兄はつぶやく。

犬、犬、仔犬。私って、そんなに煩いでしょうか。

すると高原兄は私の頭をガシガシと撫でた後、腰を屈め何を思ったか――。

「うわ！ うわ！ 今のなに！」

慌てて、今、私の頭上を感じたアクションを取り消すように、自分の両手で頭の上を振り払う。

この人、やったよね。今。私の頭に、頭にい！！

「うん、男って、やられちゃうんです。強気発言のあとの女の子からの可愛い『ごめんなさい』を聞くと」悲しい性だよね、と高原兄が言う。

何が、悲しい性じゃ！

「や、や、だから、だから、ああ！ 男の人って嫌っ！ ひったくり犯も空き巣も大嫌い！ 今のなしですから、私の記憶からデリートですから！ 私、男の人のことなんて全然信用してないんですから！」

「え」

「……あれれ」

言った私も驚いたけれど、高原兄も私の剣幕に驚いた顔をした。

―― 私、男の人のことなんて全然信用してないんですから

そうか。

そういうことか。

鳥の巣のような頭をしながら、ようやく気がついた。

つまりは、そういうこと？

お姉ちゃんが言っていた、りんごのかけら。
発見。

いい思い出ばかりじゃないですか

翌日の日曜日。

私は目を覚ますとすぐに、ウォーキング仲間のおじさまに「今日はお休みします」とメールをした、ベットの中から。

そして、もぞもぞと起きると気が進まないながらも食堂へと向かった。

「おはようございます」と言いながら、もう慣れた、流石に慣れた高原兄のエプロン姿を見た。

母はご飯をよそっていたので、私はお茶をいれた。玄米茶にした。

「あ、お茶のいい香り」

お味噌汁を置きながら高原兄が言う。

「ふふ。春匡さんってば、お目が高い。今日子はお茶をいれさせたから家族で一番うまいのよ」

ほほほ、と母が笑う。

「家族で一番ってところが、ささやかでいいですね」と高原兄が言う。

むむ。朝から、喧嘩売ってんのか！

とはいえ、食卓を囲む人数が多いのはそれだけで楽しいものだ。

母も楽しそうだし。

「春匡さんの作るご飯って、おいしいわ」
母がにこにこしながら卵焼きを食べた。

高原兄の作る卵焼きは甘くなく、中に桜エビやら私にはよくわからないサムシングが入っていることが多い。

そして、確かに、おいしい。

ちなみに本日の朝食は、その卵焼き、厚揚げとお野菜やキノコが

入った煮物、お味噌汁に焼き鮭。ご飯はなんと、五穀米。しかし、メザシは、なし。

五穀米なんて食べ慣れないものにちょっと違和感があったものの、メザシなしの事実を良くした私が、厚揚げをお箸でつまんだところ、「厚揚げにもね」と高原兄の声がした。

「厚揚げ？」味がしつかりとしみたそれを頬張りながら、なんでしようという意味を込めて高原兄を見ると、「うん。厚揚げにもカルシウムはあるから」と澄ました顔で、いいやがりましたよっ。

仕事に行く母を玄関まで見送ると、私は「読書」の名のもとに部屋に籠った為、日中は高原兄とは顔を合わせずに済んだ。

お昼ご飯用にと、その五穀米とやらでおにぎりを作り、水筒にお茶を作って持ちこんだ私は、なかなか賢いといえよう。

とはいえ、読む本の用意はしていなかったので（かといって図書館に行くのも今日は面倒な気分で）、以前読んだミステリーをちらちらと捲りながらも、どうしても思考は昨日みつけた「りんごのかけら」へと向かった。

——私、男の人のことなんて全然信用してないんですから！

昨日の高原兄との会話の中で、ぽんと飛び出た言葉。

あれが姉の言っていた「りんごのかけら」の正体なんだと、私は初めて自覚した。

信用していない。信じていない。

そう、私は彼が——森川君が何を言おうと、彼の言葉を信じることはしなかったのだ。

そもそも、信じる以前に、そのことを放棄したと言ってもいいと思う。

その代わりに、私は同性である彼女の言葉を受け入れたのだ。

森川君と付き合っていたのは大学二年のときで、はじめは学食でたまたま席が隣になったことだった。

その時一緒にいたお互いの友だち同士が同じサークルという縁で、仲良くなったのだ。

私にとって森川君は、初めての彼だった。

一緒に授業を受けたり、お昼を食べたり。

周りから「オママゴトな二人だ」なんて冷やかされていた、そんな時だった。違う学部の子が、私のところにやって来たのは。

彼女は「森川君との子どもができたから別れてほしい」、と私に言ってきたのだ。

彼女からの言葉で、一番最初に浮かんだのが、森川君が赤ちゃんを抱っこしているシーンだった。

そして、そうか森川君はお父さんになるんだ、と思った瞬間、その赤ちゃんが私で、そしてうちの縁側の下に落ちている姿が浮かんでしまった。

それで、もう、ダメだった。

あれは違うんだ、誤解なんだという森川君の言葉を聞こうともせずに、私は彼との間にサツとシャッターを下ろした。

私だって森川君のことが好きだったはずなのに、なのに、こんな風に終わりにしちゃえる自分に驚きを感じた。

冷めていると思った。

その話を、タイミンク良く「そういえば最近彼氏とはどうなっているの」と訊いてきた姉にしたのだ。

子どもの話は、結局は嘘だったのだという、ことの顛末をつけて。

森川君とその子は同じサークルで、聞いた話によると彼女が誤解するほど仲はよかったらしい。

二人の関係が、そんなことが起きるようなところまで進んでいたかどうかは、闇の中だが。

ともかく、こうして私は「彼」を失った。

もしかして、と思う。

もしかして彼女が、「子どもができた」という理由で私に迫ってこなかったら、どうなっていただろうと。

「あんたたちのお父さんはね、酷い男だったよ」

それは、高校を卒業する前に、祖母が私に教えてくれた話だ。

「今日子は小さかったんで知りようもないし、佳子^{かこ}たちはあんたに本当のことは言わないだろうから」

これは今日子の為を思つての話なんだよ、と。

将来今日子に変な男に騙されないために、そして万が一あの男がここに戻ってきたときに追い出せるようにだよ、と前置きをして。

「あれは今日子が赤ちゃんで、ようやくはいはいができるようになった頃だね」

まだ一歳の誕生日も迎えていなかった、と祖母は言った。

「未来の幼稚園だか学校の遠足に佳子がついて行ったことがあってね。家には今日子とあの男だけだったんだよ」

祖母は、はあとため息をつく、と、かわいそうに、と私に言った。

「佳子の留守中だつていうのに、あの男は家に女を呼んだんだ。そして、赤ちゃんである今日子を、昼寝をしているからといって一人でほったらかしにしたんだよ。そしたら、起きた今日子は、覚えたてのはいはいで家の中を動いてさ。ついには、縁側から落ちて腕を骨折したんだよ」

ほら、その縁側だよ、と祖母は和室の縁側を指した。

そして、私の記憶にない骨折箇所をそつと摩ってきた。

「わかるだろ。結構高さがあるんだから、もう、そこから落ちたつて知った時は肝がつぶれたよ。幸い、腕だけでね、本当によかったよ、打ちどころが悪かったら大変だったよ」と。

祖母の話だと、父は全く何の役にも立たなかったそうだと。

その頃はまだ私たちとは別々に暮らしていた祖母が、たまたまその日に家に遊びに来た時にその事故は起きたそうで、祖母が救急車を呼んだり私の世話を引き受けてくれたそうだと。

両親の離婚は、その直後。

つまり祖母は、離婚は父が一方的に悪く、あんたたちは何も悪いところはないんだ、ということと言いたかったらしい。

けれど、私の心にはそうは響かなかった。

そもそも、祖母に聞くまで、おめでたくも私は両親の離婚の原因について深く考えたことはなかったのだから。

勿論、別れたというのはそれなりの理由があったのだろうが、それは私には関係しようもないことだと思っていたからだ。

祖母からの話を聞いたことで、私が一番参ったのが、自分がそのきっかけを作ったかもしれない、ということだった。

もし、私が縁側から落ちるようなことがなければ。

もし、落ちても骨折をしなれば。

両親のもとで、姉と私は暮らしていたのかもしれない。

母だって、こんな土日にも働くような仕事は、しなくてよかったかもしれない。

姉だって、大学に行けたかもしれない。

そんな、重く苦しいものが、体の中に溜まっていくのがわかった。

そして、その象徴として、私の中に一つの映像が生まれた。

縁側の、そう、この家の縁側の下に落ちている赤ちゃんの姿。

家にあるのは、いい思い出ばかりじゃないのだ。

そして、父に対しても、祖母が思うような感情は湧かなかった。

酷いも何も、そもそも私には父の記憶もなかったので、その記憶にない人に対してそういった感情を抱くというのは、難しかったのだと思う。

けれど、父に湧かない分、男の人全般にその思いは向かっていったのだろうか、と今は思う。

それが、私にとって身近な男の人になった森川君に向って、彼の子どもができたと聞いた瞬間に、彼との間にシャツターを下ろす形で表れたんだと思う。

ただ、ほんとうに、私の自覚としては、男の人が嫌いだとか信用していないとか、そういったものはなかった為に、自分さえも自分の行動に「冷めている」としか感じる事ができなかったのだろう。

根本的なことを、見る事ができなかったのだ。

そう考えると、私でさえよくわかっていなかった自分の行動の意味を、姉はよくわかったものだなあと思った。

私よりも、私のことをよく分かっていると。

……もしや、姉は気づいていた？

私が、両親の離婚の経緯を知っているってことに。

うーん、わからない。

こればかりは、直接聞いてみないと。

携帯を取り出し、改めてストラップを眺めた。

どんな気持ちで、姉はこれにくれたんだろう。

どんな気持ちで、森川君のことを聞いてたんだろう。

姉と会いたい。

会って話したい。

姉がいなくなってから、初めて強くそう思った。

お花見は好きですか

寝不足の目で、朝日を眩しく感じながら改札を抜けると、「今日子ちゃん、おはよう」と事務室の先輩である山下さんに声をかけられた。

「おはようございます」と返しながら山下さんのマスクをちらりと見て、自分の口元を指しながら「今日は辛いですか」と訊くと、「もう勘弁してほしいわよ」と山下さんは涙目で訴えてきた。

山下さんは花粉症で、三月に入った途端マスクを着用していた。春は、私にとっては寒さから逃れられるありがたい季節なのだけれど、人によっては恐怖の季節なんだなぁと山下さんに出会って強く感じていた。

とはいえ、学校へ向かう街路樹に植えられた桜の淡い花が次々と咲く光景は、山下さんも楽しんでいるようだった。

「桜、せっかくだから、入学式までもつといいわよねえ」そんな山下さんのマスクで曇った声に、「もってほしいですよ」と私も返した。

と、その時、バックの中の携帯が震えたので、「すみません」と山下さんに断りそれを取りだした。

携帯を開くと、なんと姉からのメールだった。

そこには、『今週中には帰ります』の文字が、やたらとデゴデゴとしながら光っていた。

はつきりいって、読みにくい。

でも、そうか。姉もようやく帰ってくるんだなぁ、と一旦はほっとしたものの、「今週」はまだ始まったばかりだということに気づき、つまり、まだ当分は帰らないってことじゃないのと思うと、私

は肩すかしをくったような気分になった。

とはいえ、元気そうでよかったとそれは安心したことではあったけれど。

やれやれ朝から人騒がせな、と肩を落とし携帯をしまおうとした私に、「今日子ちゃん、待って!」と山下さんがマスク越しとは思えないような大声をあげてきた。

ただならぬ山下さんの口調に何事かと思い「は、はい」と返事をすると、私はその場でしゃきんと背筋を伸ばした。

「その携帯のストラップ、ちょっと見せて」

山下さんの言葉に、私はそのまま自分の携帯を彼女に渡した。

「……うわぁ、びっくりした。本物かと思った」

ありがとうね、と言うと山下さんは携帯を私に返してきた。

「本物?」

本物ってどういうことなんだろう、と思って私もストラップを眺めた。

「あ、ごめんね。本物とか言っちゃって感じ悪いよね。別に今日子ちゃんのが偽物とか、そういった意味で言ったんじゃないの。誤解しないでね」

そう山下さんは言うのと、「その、まぁ、この場では『本物』って言葉を使っちゃうけど、その本物は、今日子ちゃんみたいになりんごの部分が全部赤じゃなくて、ところどころに金色が入っているのよ」と言った。

そして、「……あのさ、今日子ちゃんって、ネットとかやらない人だっけ」と訊いてきた。

「ネットって、パソコンで? 仕事では使いますけど、家ではあまり」

姉は自分のパソコンを持っていたが、私はあまり興味もなくて、使うときは姉のを借りる程度だった。

「そっか。だったら知らないかな。今さ、ちょっとしたブームなん

だな。『ゴールデンアップル』が」

「……ゴールデン」

「うん、『ゴールデンアップル』。携帯のね、ストラップ」

山下さんの話によると、『ゴールデンアップル』とは、個人のブログで最初に紹介されたものらしい。

そのりんごのストラップを購入した女性が、それを携帯に付けてから「願い」が次々と叶ったという記事を書いたという。

すると、それに反応するかのように、次々といろんな人が自分のブログで、実は自分も同じのを持っていて、同じように「願い」が叶ったとの書きこみをしたのだという。

みな自分が持っているそのストラップの写真も載せていたので、山下さんのように本物を見たことがない人でもその姿は、脳にインプットされているとの話だった。

「それ、なんだか、思いつき」嘘くさいんですけど、と言いたいところを我慢してその言葉を飲み込むと、山下さんは私の言葉に云々と頷きながら「まあ、そうよね。そこらへんは、みんな分かっているというか、分かりながらも欲しい気持ちもあるっていうかさ……うん。まあ、みんないろいろ抱えているのよ。でね、それにね、今はそのストラップに願いをかけるっていうよりも、そのストラップを手に入れると幸運が訪れるみたいな空気があって」ネットでのやり取りもちょっと危ない感じなのよね、と言った。

「手に入れるって、欲しい人は買えばいいんじゃないんですか？」それともすごく高額なんだろうか。

「それがね、もう売っていないんだって」もったいないわよね、売れば儲かるのに、と山下さんが言う。

「儲けたいですねえ」と私が言うのと、「ほんとよ」と山下さんが笑った。

春休みの学校は、一日中が放課後のようなのかな雰囲気を醸し出している。

登校しているのもクラブ活動の生徒たちだけで、たまに学校見学の親子は来校するものの、人の出入りは少なかった。

事務室の仕事も、来年度に向けての雑多な用意はあったものの、授業がある時とは比べ物にならないくらい少なく、比較的落ち着いた様子をみせていた。

事務室のお昼休みは交代制だった。

昼休みだからと事務室を閉めるのは、生徒にとって不都合だということで、時間差をつけてとっていたのだ。

それこそ、授業がある時は、少し早めに帰ってくるくらいの休み時間の取り方をしていた私だったけれど、学校が休みの時は、時間一杯までその休みを堪能していた。

今週の私の休みは早番だった。早番は、十一時半からが昼休みだった。

朝からの陽気は今も続いていたので、私はコンビニでパンを買い、持参の水筒を持って学校にある大グラウンドのスタンドへと向かった。

そこからだと、グラウンドの向こうの川沿いに植えられた桜並木を一望できたからだ。

山下さんも早番だったので、無理かなと思いつつも誘うと、やはり彼女は部屋からはなるべく出たくないということだったので、スタンドには私一人しかいなかった。

少し早いけれど、お花見だ。

スタンドに座ると、グラウンドを走っている生徒たちの姿が目に入った。

もうそろそろ休憩なんだろうな、と思いつつ、漠然とその様子を視界に入れつつパンを食べた。

あんなに楽しかった。もちろん、この間見たフリーペーパーの影響。

それで手早くお昼を済ますと、私はグランドの端を、向こうの川沿いを目指して歩きはじめた。

昨日出来なかったウォーキングの代わりにはならないけれど、歩くのはやっぱり体にもいいし、気持ちもいいからだ。

見ると川沿いには、私と同じように考えている人たちが歩いていた。

私も急ごうと、歩く速さを上げた時、どうも左目にグランドの仕切りとなる柵だけでなく、知ったような後ろ姿を認めた気がした。

立ち止り、その方向――グランドの中を見ると、ジャージ姿の男性が生徒と一緒に立ち話をしていた。

その後ろ姿を見て、首筋に鳥肌が立った。

いや、まさか。

そんな、気のせい。

そうは思いつつ、もしや、よもや、の思いでその男性をじっと見ていると、側にいた生徒たちが私に気がつき、そしてその男性もおむろに振り向いてきた。

「ああ、今日子ちゃん」

ああ、今日子ちゃん。

ああ、今日子ちゃん、って！

「え、高原先生、今日子ちゃんのこと知ってんの？」

側にいた生徒がびっくりした顔をした。

親戚なんだ、と高原兄がその子に言う。

――親戚。

くらりと眩暈がした。

思わず、柵につかまりながら、私は散歩はとりやめにして、よろよろと事務室へと戻った。

ポジションは仔犬ですか

「高原先生」

「ははは。なんだか声が怖いなあ、今日子ちゃん」

「あら、今日子ちゃん。『高原先生』だなんて、他人行儀な呼び方をして」

他人行儀もなにも他人ですから、と思いつつ、また例のごとく楽しい一家……じゃなくて、一家と一人の他人の夕食である。

ちなみに今晚のメニューは、母の作った白菜と豚肉の鍋だ。シンプル イズ ベストな一品。

熱々の白菜と薄切りの豚肉を、ごまだれやポン酢といった好みのたれで食べるのだ。

大分特産と書かれた青柚子胡椒も、オプションとしては有効。

鍋の季節もそろそろおしまいだなあと思いつつ、肉ばかりを選んで箸でつついた。

「……もう。とにかく、お母さんは知っていたの？ この人が学校の先生だなんて」

そう言いながら、豚肉とポン酢の入った器に柚子胡椒を加えた。ふわっと爽やかな香りが広がる。

「今日子ちゃん、何度も言うけれど『この人』じゃなくて」
肉しか入っていない私の器の中に、母が白菜をばかすかと入れだす。

「ああ、やめて！ まずはお肉だけを食べたいんだってば。白菜はね、このお鍋の時はデザートなのっ。もう、ああ、とりあえずそれ以上は入れないで、ね、ね。で、はいはい、この人じゃないですよ。春匡。春匡、春匡、春匡だよ。失礼しました」

私がそう連呼すると、「いやあ、そんなに熱烈に呼んでいただいて、光栄だなあ」お礼に、と高原兄は私の器に白菜を入れた！

……だからね、白菜が嫌いとかじゃなくて、最初は、肉気分なんですよっ！

ああ、もう、肉が、見えないんですけどお。

器一杯に盛られた白菜を見てがっくりきたものの、しかし、ええい、これしきのことで負けるもんか、と気を取り直し、白菜だけをどんと口に放り込みだした私に、「まあ、二人ともすっかり仲良くなって」と母が見当違いなことを言ってきた。

お母さん、あなたの目は節穴ですか。

「それにしても、私、春匡さんのお仕事のことを今日子ちゃんに伝えていなかったのかしらねえ」ボケちゃったかしら、と母が言う。その表情からすると本当に忘れていたようだ。

「でもね、今日子ちゃん。だからこそ、ご近所のお子さんたちがうちに勉強に来たんでしょ」

ねえ、春匡さん、と言うと、まあ、そうなんですけどね、と高原兄は言った。

「……え。じゃ、なに。近所のおじさまがたには、自分が教師だつて言ったわけ？」

知らないのは私だけだったの、と訊く。

「自分から言ったというよりは、訊かれたから答えたといったほうが正しいかな、うん。まあ、近所の人に見れば、母と娘の家庭にいきなり見慣れない男が出入りしだしたんだから、心穏やかではなかったんだと思うよ」

一番最初に訊いてきたのはお隣の奥さんだったよ、と高原兄は言った。

私は、丸い顔に丸い頬丸い目に丸みを帯びた体の、お隣のおばさんを思った。

「お隣のおばさん、そんな詮索好きな人には見えないけどなあ」

私がそう言うと、「詮索好きとか、そんなんじゃないと思うよ。」

……多分、今日子ちゃんところは、ご近所のみなさんから大切にされてるんだよ。だからこそ、変な男がいるんじゃないかって心配なんだろうし。その男が先生っていうなら、じゃあ、勉強でも見てもらうかってことになったんじゃないのかな」と高原兄が言った。

……なるほど。そう言われたらそうかもしれない。
でも。

「でもさ、おかしくない。体育の先生に、読み書きを習おうなんて」
もう、ここしかないという文句のつけどころを狙って、私は言う。

高原兄は、うちの高校の体育の先生になるそうだ。

更には、陸上部の顧問もするという話だ。

そう思うとなるほど、この前のひたくり騒ぎの時のあの俊敏さは、納得できるところである。

「それにしても、赴任先が今日子の学校だったなんてねえ」ご縁がありますわ、娘をよろしくお願いしますね、と母はまた高原兄に頭を下げている。

「いえいえ、こちらこそ。恩師が定年退職なので、後釜に呼ばれまして」あの高校は多くの母校でもあるんです、と高原兄は言うのと、
ぼくも陸上をやっていたので、と付け加えた。

へえ、陸上部ねえ、と思う。

そして、この高原兄にも高校時代があっただなあ（そりゃそうだけど）と思った。

まてまて、高原兄が一八歳の高校生だとして、私は今二十三歳。
つまり、年齢差は五歳。

今、高原兄が仮に三十として、私との年齢差は七。

高原兄が高校生の方が、私との年齢差は少ないってことなんだ、と計算してしまう。

それはちよつと、妙な感じだった。

そして、高原兄はどんな高校生だったんだろう、とも思った。
陸上をやっていたってことは、あのグラウンドを走っていたんだろ
うか。

すると突如、私の目の前にはそのグラウンドが広がり、スタンドに
座る私と、その前を走っている高校生の高原兄の姿が浮かんだ……。

「今日子ちゃんが、生徒たちに人気があって驚きましたよ」

高原兄の声に、ぱっと覚醒する。

なんだ、なんだ今の映像は。

映像っていうよりも、妄想？

「まあ、今日子が？」

「ええ、みんなから、今日子ちゃん、なんて呼ばれてますよ」

高原兄が、ねえ、今日子ちゃん、と言ってきた。

「うっ。あれは、人気とかそんなじゃなくて、私の年が彼らに近
いっていうのと、うちの苗字がちよっと呼ぶには面倒というか」

確かに、事務室の中で生徒にもお仕事仲間にも「下の名前」で呼
ばれるのは、私くらいだ。

「あらあら、まあ、大変。『今日子ちゃん』なんて呼ばれているの
？ まあ、今日子って名前は可愛いし。それに、ふふ。ほら、今日

子はマスコットだから、みなさんに大事にされるのね」

母がまた、ほほほほ、と笑う。

笑いでごまかしているけれど、さりげなくの親ばか発言に聞いて
いるこっちが赤面してしまう。

それに、そういうば、この母の笑い声も最近の定番になってきた
なあ……と思った瞬間。

嫌な考えが閃いてしまった。

この母の「ほほほほ」は、高原兄が登場してから頻繁に出てくる
ようになった、ような。

そう、高原兄が来てから母は嬉しそうな、ような。

高原兄も母の事を三国一の美人だと褒めていた、ような。(あ、そこまでは言っていないか)

つまり。

高原兄と母は、ラブ？

そして私のポジションは……仔犬。(つまりペット)

高原兄は、お兄さんじゃなくて、お、お、お、お父さんですかい。

いやはや、そうでしたかと、しげしげと高原兄を見る。

高原兄は、体育の先生で陸上の顧問になるほどだから、体は頑丈だろう。

収入は、まあ、先生だし、そうヤングってわけでもないんだから、そこそこあるでしょう。

人柄は、まあ極悪人ではないようだし。

料理だって作れるし。

ふむ。

そう考えると、高原兄は決して悪くはないと思われた。

なにより、母が楽しそうなのがいい。

母は五十だから、つまり高原兄との推定年齢差は、二十。

……なんだ、だったら、私のほうが近いじゃない。

いやいや、そんな年の近さは関係ない。

問題は、お互いの気持ちなんだから。

そんなことを考えていたら、母の「今日子がね」という声が聞こえててきた。

「小声ならいいって思ったのかしらって」

「——えっ。何の話？」

「ほら、恵方巻き。先月の恵方巻きの話よ」

あらら、と思ったが、母はうきうきと話しだす。

「ほら、恵方巻きって、食べている間はしゃべっちゃいけないんですってね。福が逃げるとか。あれをね、未来も一緒に三人でやって

いたの」

「お母さん、その話は」

「ううん。春匡さんに訊いていただかなくちゃ。でね、私が途中でちよつとむせてしまった」

年寄りには結構あれはきついわ、と母が言う。

「そうしたらね、今日子が、小さな小さな声で『お母さん、大丈夫』って言って背中を摩ってくれたの」

あちゃあ、と思う。

「私、云々と頷きながら、今日子の向こうにいた未来と顔を見合わせちゃったの。だって、話しちゃいけないのよ。なのに、今日子ったら『大丈夫って』って。でもね、小さな声なのよ。小さな、小さな。しゃべってはいけないってことは、小さくても声を出しちゃいけないのに」

母は話しながら笑い、そしてその瞳は潤んできていた。

「私、もう胸が一杯になっちゃって。この子、『お母さん、お母さん』って。もう、人のことばかり心配して。それで自分の幸運を使ってしまったら、しょうがないのに」

「うわあ、うわあ。もう、もう、恥ずかしいからやめて！ その話は、つまり、しゃべってはいけないって決まりなのに、私が小声なら話しても大丈夫って思っているちびっこと同じって話でしょ。自分でも恥ずかしいんだから、もうおしまい！ おしまい！」

私は空気中に漂う言葉をかき消すかの用に、腕を振った。

「……たしかに、今日子ちゃんはマスコットですね」

そう高原兄は母に言うと、「好きですね、ぼくはマスコット」などどたわたけことを言ってきた！

うわ、何、今の。ちよつと。

チェンジよチェンジ。

早く、この場の空気を変えないと。

「……そ、そうそうそう！ 今朝、お姉ちゃんからメールあったの

！」

私の言葉に、高原兄と母が揃ってこっちを向いた。

「ええと、あまり期待しないで。ただ一言、『今週中には帰ります』ってだけだったんだから」生存確認の意味では有効だけどね、と私は言った。

すると、「今週中」そう言うとき母は、宙を見つめ、ぼうつとした顔になった。

そして、「今週中」高原兄は、眉間にしわを寄せると、難しそうな顔でそうつぶやいた。

あれ、お二人さん。
ちよっと様子が変なんです。

防犯ブザーは必要ですか

翌日も、迷った挙句「お花見なんだから」と口実をつけて、おにぎりや水筒持参でグラウンドでの陸上部の練習を眺めた。

いつもはいろんなクラブでこったがえしているグラウンドも、今は陸上部だけが独占している状態だった。

そして、昨日は気づかなかった高原兄の恩師で定年になる宮城先生の姿も、そこに見つけた。

高原兄は、正確にはまだこの学校の「先生」ではないので、学校のOBとして練習を見ているようだった。

温ぬるんだ空気の中、ハードルや短距離を走る生徒たちの姿は、伸び伸びとしていた。

そして、生徒だけでなく高原兄も、とても自由に見えた。

その姿に、ああ、この人は（この人なんて言ったらまた母に怒られそうだけど）本当に「先生」なんだと思った。

私たちと一緒に暮らしている「高原兄」ではあるけれど、「先生」でもあると。

そう考えた時、ひやりと、心の中を冷たい手で触られたような感じがした。

すごく——　　すごく嫌な感触だった。

私はふいに、「先生」をしている高原兄を見るのが辛くなった。

花見もせず水筒の蓋をきゅっと締めると、私はグラウンドを後にした。

「はい、これは佳子さんに、これは今日子ちゃんに」

高原兄は帰ってくるなり、プラスチックケースに入った小さなピンク色したものを私たちの目の前に置いた。

「あらあら、大変。これは、防犯ブザーかしら」

母は手に取るとそう言い、どれどれとケースからそれを取りだした。

高原兄は「大当たりです」と答えると、ちなみにぼくのはこれです、と首から下げた警笛を見せた。

……その笛って。

「なかなか、犯人は捕まらないようなんでは」

近所のおじさまがたとの約束通り、高原兄は自警団の夜の巡回に参加していた。

そこで、いろいろな情報が入ってくるらしい。

「ひったくりなんて、うま味があるのかしら」と母がつぶやいた。

母のつぶやきを聞きながら、私は机の上に置かれた防犯ブザーを見るものの、それを手にすることはできなかった。

「怖い？」

高原兄が訊いてくる。

「……怖くなんて」慌ててケースからその小さなものを取りだす。

「今日子ちゃん、これはね、ここを押して」

高原兄は私の手からそれをそっと取ると、使い方を教えてくれた。

「いいかい、今日子ちゃん。バスを降りたらまずこれを手に持って、何かあったら、変だと思ったら、間違ってもいいからこのボタンを押すんだよ」

わかった、今日子ちゃん、と高原兄は私の顔をじっと見て確認してきた。

私も高原兄の顔を見て、情けない声ながらも「はい」と答えた。

本当に情けないけれど、高原兄の言う通り私は怖かったのだ。

これを持たないと、もっと怖いんだろうけど、「持つ」ということは「持たなくてはならない事実」があるってことを常に感じながら歩くってことで。

それを持つことで、犯罪がすぐ隣にあるんだと意識するのが怖かったのだ。

ミステリー小説が好きで、フィクションなら怖い犯罪の物語も読める癖に、現実の犯罪に直面すると恐ろしくてしょうがない。

弱い犬ほど良く吠える典型的な人間なのだ、私は。

その小さなブザーを掌にぎゅっと握りながら、同じ空の下にいるであろう犯人が一刻も早く捕まることを、私は願った。

暗くなった町にバスから降り立つと、私は高原兄の言いつけ通りにバックのポケットから防犯ブザーを取り出し、手に握った。

そして「K2」をちらりと見ながら、遂に今週の金曜（明後日だ！）にやってくるお給料日を思い、気持ちを浮上させた。

今週といえば、姉も帰ってくる。

姉が帰ってくるってことは、当然高原さんも一緒なのだろうし。

……。

今、私の頭の中を過ぎ^よったことは、一個八百円の「黄金林檎」をお給料日にいくつ買うかということだった。

現状であれば、私と母と高原兄の三人分×八百円でいいものが、姉がそれまでに帰ってくると二人増えて五人分となってしまう。

……。

いや待てよ。

姉が帰ってくるってことは、高原兄がこの家を出ていくんだろうし、そうなる三人分でもいいのかな。

ああでもない、こうでもない、いろいろなパターンを考えているうちに頭が痛くなってきた私は、初心に戻りシンプルに、姉が「

お給料日後」に帰ってくることを夜空に煌めくお星様をお願いした。

手の中の防犯ブザーだが、触るのも怖かったはずなのに、いざこうして持ってみると不思議なもので、とても安心できた。

——何かあったら、変だと思ったら、間違ってもいいからこのボタンを押すんだよ。

高原兄の言葉が、まるでおまじないのように私の心を包んでいた。

大丈夫、うん。怖くない。

「あれ、今日子ちゃんじゃない」

お帰り、と町内会の腕章をつけたおじさまがたが角を曲がってやって来た。

自警団の夜の見回りだ。

「こんばんは、いつもありがとうございます」と私が言うと、「ああ、いやいや。なんだか物騒で困るよね」とおじさまの一人がそう言った。

「そういえば、婿殿が用意するって言っていたけど、今日子ちゃんは、防犯ベルを持ったかい」と違うおじさまに訊かれたので、掌にあったそれをぱっと見せた。

おじさまがたはほっとした顔をして、「今日子ちゃんたちに何かあったら、おじさんたち今日子ちゃんとこのばあさんに崇られるかな」と笑った。

「え、おばあちゃんに」

びっくりしてそう訊くと、「そうだよ、今日子ちゃん。今日子ちゃんとかのばあさん、凄かったじゃない。『私が佳子たち三人を守るんだ』って、えらい勢いあってさ」

すると違うおじさまが、「うんうん。ちょっと行き過ぎじゃないかって思うほど、ガードが堅かったもんね」と言った。

そして、この辺りはみな子ども同士も仲がいいけど、あまり今日子ちゃんたちは他の子との交流もなかったでしょ、と。

……言われてみればそうかもしれない。私には姉がいるから、さほど不便はなかったけど。

「なんでも、ばあさんも旦那さんで苦勞して、佳子さんも離婚しちゃったから、あまり他人を信じていないって話だったよ」

「まあ、気持ちにはわかるけどね」とおじさまが言う。

「でも、そんなばあさんが、いよいよ体の自由がきかなくなったってとき、俺たちにさ『佳子たちを、よろしくお願いします』なんて頭を下げてくるじゃない。それまであまりうちら近所を頼るってことなかったから、驚いたのなんのって」

まあ、それだけに響いたよね、とおじさまは言った。
初めて訊く話に、私はびっくりした。

—— 今日子ちゃんところは、ご近所のみなさんから大切にされているんだよ。

高原兄とはまだ出会って数日なのに、その言葉は、いろんな場面で私に語りかけてくる。

知っていたのに知らない、見ていたのに見ていなかったことを、教えてくれるのだ。

その事実には、私は戸惑いを感じた。

自分の中で、高原兄の存在がとても大事なものになっているんじゃないかって、気がしたのだ。

と、その時。

「—— やっ！ いやあ——！」

角を曲がった向こうから、女性の叫び声が聞こえた。
けれど、私もそして見回りのおじさまたちも、まるで金縛りにあったかのようにお互い見つめあったまま動けなかった。

「お、おい！」

一人のおじさまの声で、ようやく他のおじさまたちがわらわらと叫び声のする方へと動き出した。

けれど、私は動けなかった。

体が硬直したかのように、その場から動くことができなかったのだ。

「おい、こら、待て！」

おじさまたちの叫び声を聞きながら、私はその場所で蹲ると、ひたすら心の中で助けを呼んだ。

怖い！

誰か！

助けに来て！

お母さん！

お姉ちゃん！

……高原兄！！

「今日子」

母の声に、ゆっくりと顔を上げる。

そのまま、蹲ったまま腰が抜けたように動けなくなってしまった私は、おじさまの連絡により来てくれた母と高原兄と一緒に家に帰ることになった。

角を曲がると、近所のおばさまが被害にあったと思われる女性の体を毛布でくるんでいた。

彼女は一言も話さず、そして私とは比べ物にならないくらい憔悴していた。

私でも怖かったのだから、この人はもっと怖かったんだと思った。

彼女の横を通りながら、ごめんなさい、と心の中で謝った。

母と高原兄に挟まれるようにして歩いた。

私の手の中にあつた防犯ブザーは、役目を果たすことなくバックにしまわれた。

もし、叫び声を聞いた時点で、私がこのブザーを押していたら。

―― 憔悴したあの人の顔が浮かぶ。

犯罪は防げただろうか。

私が行動を起こしていたら。

今よりも、少しはいい結果になっていただろうか。

あんなに高原兄からブザーの使い方を教えてもらっていたのに、私は怖さのあまり、ブザーを押すという考えさえ湧かなかったのだ。

―― 間違いでもいいからこのボタンを押すんだよ。

そう言ってもらっていたのに。

「ごめんなさい」

震える声で、高原兄に言う。

「なにを言っているの、今日子ちゃん」高原兄は、ぎょつとした顔をした。

「ブザー、せっかくもらったのに、私、押せなくて。犯人、逃がしちゃって」

家族でもないのに、他人なのに、心配してくれたのに。

「そんなこと」高原兄が強い口調で否定する。

「今日子が無事でよかった」

母がふうと、はきだすような声を出した。

よかった、母は再びそう言う私の体を抱きしめた。

防犯ブザーは必要ですか（後書き）

防犯ブザーもベルも、同じものを指して使わせていただいています。
（年代で違うかなあと）

傾国の美女の登場ですか

朝起きると、母からは仕事を休むように言われたけれど、私は行くことにした。

家にいるよりも、外に出たほうが気が紛れると思ったからだ。

心配顔の母と高原さんの二人から、帰りのバスに乗る前には必ずメールを入れるようにと言われた。

メールの相手は、この二人。

手が空いている方が、バス停まで私を迎えに来てくれるということだった。

なんといいますか、私は急に少女に戻ったような気分になった。

母と高原兄に、守られているような……。

それは、ちよつとくすぐったい感覚だった。

二十歳を過ぎて、はたち今更な感覚。

帰りのバスを待つ間、いつけ通りに「帰るメール」を入れると、すぐに高原兄から返信があった。

お迎えは、高原兄のようだ。

バスの揺れに身を任せていると、私が降りるバス停のアナウンスが流れた。

私はゆっくりと降車ボタンを押すと、窓から外を眺めた。

すると、暗い町に灯台のような光を放つ「K2」の側に、高原兄が立っている姿が見えた。

あ、いた、と思ったと同時に、私の中から嬉しいという感情が湧きおこってきた。

嬉しい？

バスに乗る私に気がついた高原兄が、私に向ってぱっと手を振ってきた。

私も慌てて、同じように手を振った。

そして、このどきどきとする気持ちをどうしていいかわからないまま、バスを降りた。

「おつかれさん」

高原兄はそう言うのと、周りをきよろきよろしたあと、「帰ろうか」と言ってきた。

帰ることになんら異論のない私は、大きく頷いた。

高原兄は私の背中をぱっと押すと、私を歩道側に寄せ自分は車道側を歩きだした。

思わず、「あっ」と声が出てしまった。

「あれ、どうかした」と高原兄が訊いてきたので、私は首を振った。

森川君とは付き合った期間も短かったし、大学で過ごすことが多かったので、あまりこうして外と一緒に歩いた覚えがなかった。

そのせいかな、こうしてさりげなく車道側から歩道側に歩く場所を移されるという経験もなかったのだ。

高原兄にしてみたら、別にどうってことないことかもしれないけれど、私にとってはそれはちょっとときめく体験であったりする。

「今日子ちゃん、今日は大人しいね」

もしかして昨夜のことを思い出したかな、なんてことを言ってきた。

昨夜のことなんか、ちっとも思い出していなかった私だったけれど、「はい」なんて口からは嘘が飛び出した。

すると高原兄は何も言わずに、私の頭をくしゃと撫でてきた。

その仕草が優しい。……嬉しい。

うわわわ、どうしよう。

もしかして、もしかしたら、もしかしくても。

私は高原兄のことを……。

一人で頭の中が大カーニバルになってしまった私の耳に、「あれ。あの人、誰だろうな」と訝^{いぶか}しげな高原兄の声が聞こえてきた。

私たちは、既に家が見えるところまで帰ってきていて、この場所からでも自宅前にタクシーが停まりそこから一人の女性が降りてくる姿を見ることができたからだ。

「お姉ちゃん、かな」

口ではそう言いながらも、頭ではその人物が姉ではないと分かっていた。

女性はチャイムを鳴らしたようで、母が応対に出るのが見えた。

そして二人は、そのまま家に入って行った。

高原兄と私は顔を見合わせたあと、足を速めて家へと向った。

「ただいま」と言いながら玄関を開け、そこにあるパンプスを眺めた。

薄いベージュ色した高級品で、中敷には、ブランド名がプリントされていた。

これは、姉のではないと思った。

高原さんと二人で、どやどやと部屋に入ると、一人の女性が私たちに背中を向けるようにして座っていた。

「あら、おかえりなさい」と母は言う、その女性の前にお茶を置いた。

「あ。……もしかして、美由紀さん？」

聞きなれないトーンの高原兄の声が、その女性の背中にかけられた。

その人がこっちをゆっくりと振り向く。

「お久しぶり、春匡さん」

傾国の美女と表現するに相応しい女性が、我が家のふるぼけた食卓に座っていた。

美女と高原兄は、母の勧めで高原兄が使う和室へと引っ込んだ。

「はあ、びっくりしたわねえ」

母は小さな欠伸をすると、先にご飯をいただきましたしうねと言い、井に入れたご飯の上に鶏肉と玉ねぎを卵でとじたものを載せた。

今日の夕飯は、親子丼とお味噌汁だ。

「びっくりって、ねえ。ショックじゃないの？」

私は自分の心臓音を隠すかのように、早口で母に訊いた。

女性がわざわざ訪ねてくるなんて（しかも高原兄本人は知らなかったみたいだし）、これはどう考えても、明らかにただごとではない。

母は私の言葉に、あら、という顔をした。

その母の顔を見て私も、あら、と思った。

母がいつになく疲れた顔をしていたからだ。

「ああ、ほらさ。お母さんは、高原さんのお兄さんのこと気に入っていたみたいだし」もによもによと言葉を濁しながらそう言う。

「あら。まあ、そうね。好きだわ」

母はそう言うのと、少し笑った。

好きだわ、だって！

「なら、ほら、お母さん。美女に負けずに和室に乗り込んでさ」

そう言いながら、私は一体母に何を勧めているんだと思った。

……和室に乗り込みたいくらいに二人の事が気になっているのは、私だというのに。

「やだ、今日子ちゃん。そんなんじゃないのよ」そう言うと母は、ほほほと笑った。

「春匡さん、いい青年だなあと。流石、高原さんのお兄さんだなあと」

見る目はあるし頼りになるし、と母は言った。

「え。好きて、そういった好きなわけ？」

脱力しながら椅子に座る。

母も座りながら、「それ以外の好きがあるわけないでしょ」と言
った。

「そうか、そうだね」あはは、と笑いながら、心の中でほっとし
た私がいた。

……なに、ほっとしてるのよ、私は。

ああ、もう、大混乱よ、と思いながら「いただきます」をしたあ
とお味噌汁を飲んだ。

ともかく、お母さんは気にならないにしても、私はやっぱり和室
が気になる。非常に。

「まあ、大変。もしかして、今日子ちゃん、気になるの？」

母の問いに意表を突かれ、ごくんとお味噌汁を不自然に飲み込ん
でしまった。

「あらまあ、大変、大変。ああ、誰かにこのことを伝えたいわあ」

お隣の奥さんに話しにいかうかしら、と母が言う。

「もう、やめてよ。そんなじゃないんだから」

何がそんなじゃないのか分からないけど、とりあえずそう言う。

「ふふ。いいと思うけどな、お母さんは」母はそう言うのと、すまし
た顔でお味噌汁を飲んだ。

そして汁椀を置いた後、ふうとため息をついた。

「あのね、今日子ちゃん。明日なんだけど、夕方にかけて下宿を見
たいお客様が二組入っていて、帰りが遅くなりそうなのよね」と言
った。

「うん。わかった。じゃ、明日は私が夕飯の用意をするから」

私がそう言うのと、だったら煮込んだお肉があるからそれに野菜を
加えてカレーを作ってちょうだい、と母が言った。

「了解、了解」と返事をしたあと、「明日も大変なんだろうけど、

今日もお仕事大変だったんでしょ」と訊いた。

「うん、少しだけね」と母が言うので、後片づけは私がすることを伝え、今日は早くに休んだ方がいいよと言った。

「でも、春匡さんのお客様がまだいらっしゃるし」と母が言うので、「そんなのいいから、寝ちゃいなよ」と言うと、「あら。刃傷沙汰にんじょうごたになって、私の出番がくるかもしれないでしょ」とやけに張り切った声を出したので、私は高原兄の真似をして片眉を上げた。

夕飯の食器を下げ始めた頃、高原兄がこっちに顔を出し「お騒がせしました」と母に挨拶をしてきた。

母は頷くと席を立ち、高原兄と一緒に玄関へと向かった。

「夜遅くに失礼しました」

綺麗な人の綺麗な声がした。

高原兄と母は一緒に食堂に戻ってきたので、高原兄には夕飯を、母にはお茶をいれなおした。

高原兄は、いつもより無口だった。

あの人は彼女ですか（前）

お茶を飲み終わると母は、帰宅後すぐにシャワーを浴びたからということでそのまま寝室へと行き、私は食器を洗いだした。

高原兄は食器を下げた後、お風呂を作ると言った。

お風呂のお湯は何度にするかと訊かれたので、私は三十九度でお願いした。

食器を洗い終わり机を台布巾で拭くと、高原兄から「お風呂ができたよ」と声を掛けられたのでありがたく一番湯に浸かることにした。

お風呂の順番は、なんとなく私が一番で、次が母で最後が高原兄だった。

高原兄は、毎回お風呂場掃除もしてくれるので、密かに助かっていた。

私はお風呂から出ると、部屋着を着て、そのまま洗面所で髪を乾かし始めた。

ドライヤーをかけながら、結局美女の正体を訊くことはできなかったなあと考えた。

いくら私でも、さっきの無口な様子の高原兄に、そんな話をすることはできなかったのだ。

そして、時間が経つにつれ、そんなのは訊くまでもない野暮な話だとも思えてきた。

高原兄は大人だ。

あの美女も大人だ。

そして美女は、高原兄に会いにやって来た。

どう考えても、そこに理由は一つしかないと思ったから。

「でも、もしかして、借りた本を返しに来ただけとか」

そう自分で言葉に出しながらも、そんなことはあるはずないって分かっていた。

そのことを、認めようとは思いうけれど、認めなくてはなかった。

でも、私が認めようが認めまいが、事実の一つだ。

だったら、認めなくてもいいんじゃないかって気もしてきた。

そして、ああ、こういうところが、私の弱さなんだなと思った。分かってはいるけれど、でも……。

すると突然、そういえば、という思いが浮かんだ。

そういえば美女は、どうやって帰ったのだろうか。

高原兄がどこかで送ったわけではないのは分かっていただけに、遅まきながらひったくり犯のことが頭に浮かんたのだ。

すると、丁度高原兄が、洗面所横の廊下を歩いて来たので、「ねえ」と声をかけた。

高原兄は立ち止ると、「どうかした」と訊いてきた。

私はドライヤーのスイッチを一度止めると、「あの人、美由紀さんだっけ。送らなくてよかったの？」と訊いた。

高原兄が、妙な顔をした。

「だって、まだひったくり犯は捕まらないのに、一人で帰したら危ないじゃない」

昨日の今日の話なのに、高原兄には配慮がないのだろうか。

すると高原兄は、納得したような顔をして「タクシーを呼んだから」と言った。

ああ、なるほど。

「そっか」と私は言うと、再びドライヤーのスイッチを入れた。

「心配してくれたんだ」高原兄の声が、ドライヤーの音にかき消されそうになりつつも聞こえた。

私はてれ隠しのようになり、ふむふむと首を小さく上下した。

これで会話はおしまいなはずなのに、高原兄はその場から立ち去ろうとしない。

私は再びスイッチを切り、「あ、ごめん。直ぐにお風呂に入りたい?」と訊くと、「いや、急がないんで、髪乾かして」と高原兄は言った。

とは言われても、高原兄は、私の側に立ったままなのだ。

そんな高原兄を――つまりが横に人が立ったままで、ドライヤーをかけていいものなのか迷った。

無視というか、失礼なんじゃないかって。

高原兄の言っていることと、本人の行動がどうもちぐはぐな気がした。

そしてそういえば、この人の立ち姿を見ることが多いなあと思った。

最初は、エプロンをしてシチューを作る姿。

ひたたくり犯人を追って帰ってきた時も、立っていたっけ。

学校のグラウンドでもそう。

そして、私を迎えに来てくれた「K2」の側でも、灯りを受けながら……。

胸がぎゅつと痛くなる。

「彼女、なの?」

私は、訊いた。

「あの人。あの傾国の美女は、お兄さんの彼女なの?」

横に立っているほうが、まともに相手の顔を見ないほうが、訊きやすいことである。

それに、こんなことを聞いている自分の顔を、高原兄だけには見られなかったのだ。

嫌な表情かおをしているって自覚、とてもあるから。

「……傾国の美女、か。今日子ちゃんは、うまいこと言うね。確かに、そうだね、傾国。で、彼女、美由紀さんだけどね、ぼくの彼女じゃないんだ」

その答えに、はっとする。

「お兄さんの彼女じゃないってことは」

いやあな予感と展開に、顔が引きつる。

「冬の彼女、っていうか元彼女か」

予感中のその答えに、私は口があんぐりと開いてしまった。

あの人は彼女ですか（後）

「ちょっと、どういうこと。高原さんの恋人が、いや元恋人か、そんな人がなんでうちに来たの？　高原さんとよりを戻したいってこと」

私はドライヤーを置くと、急^せぎ込んで訊いた。

もしや、その人のことが原因で姉は「駆け落ち」をしたとか！

「うーん。冬とよりを戻したいってことではなくて」

高原兄の歯切れは悪い。

「ことではなくて？」

「うん。あのさ、今日子ちゃんから見て、冬ってどんな奴かな」

「高原さん、ですか」

「うん、そう」

「ええと、高原さんは」

あんな姉に付き合っているんだから、「心の広い人です」と言いきる。

「……心が広いなあ。ああ、その今日子ちゃんの人の内面を見るところは美徳だと思うけど、今回に限っては、その外見とかそういう一般的なことを」

「ああ、一般的なことですか、外見とか。高原さんの」

高原兄は、そうそう、と相槌を打ってきた。

「高原さんは、背が高く、脚も長くて、スタイルも良くて。髪の毛もさらさらで、鼻筋も通ってハンサムで。爪もいつも短く綺麗にしてて、ついでに持っているハンカチも綺麗。で、ええと、声も優しく、声だけじゃなくて優しく。姉の事を大切にしてくれて、そして姉だけじゃなくて母や私にも親切で、私にお菓子を買ってくれたり……ってまだ言いますかね」と訊くと、「お菓子って。……いや、十分です」と高原兄が言った。

「まあ、つまり、冬は今日子ちゃんから見てもいい男で、兄である

ぼくから見てもなかなかの奴で」

「はい」 それは、そう。

「うん。その弟が、結婚を考えているっていう女性を連れてきたのが今から五年前」

「はい、五年前。……え、五年前っていったら」 勿論、姉ではない。

「もしかしてその女性が」

「そう、美由紀さん」

「はあ」 あの美女と高原さんは、結婚まで考えていたんだ。

「冬が結婚したいって言ってきたとき、ぼくは嬉しくてさ。ぼくたち両親を早くに亡くしたから。今までは家族が減ることしかなかったから、ああ、これで家族が増えるって。冬には家庭ができるんだって」

—— 家族が減ることしかなかった。

その高原兄の言葉が凄くわかるだけに、高原さんが結婚したいと言った時の高原兄の喜びの大きさが伝わってきた。

「だから、美由紀さんにも親切にした。だって弟の大事な彼女だから」

高原兄の言葉は、私のそれと全く同じだった。

私だって、高原さんとは仲良くしたいと思っているし、大切にしている。

「間が悪かったというか。その頃、弟の仕事が忙しくなって、そのことで美由紀さんからぼくへの相談が増えてきてね」

高原兄の声のトーンが落ちてきた。あまりいい話にはならないってことが、^{うかが}窺える。

「ぼくは、二人が上手くいくようになって、弟の分まで時間を作って相談にのったんだよね」

はあ、と高原兄がため息をつく。

「そんなある時。美由紀さんは、冬とは結婚できないって言いだしたんだ。……どういうわけか、彼女はぼくのが好きだと言いだしたんだ」

「は？」高原兄のことを？ 恋人の兄を？

「で、結局おじゃん。弟たちは別れてしまった」
それって、そんなことって。

「ぼくは最初、美由紀さんが何かしらの理由で弟と別れたくなって、その口実としてぼくの名前を出したんじゃないかって思ったんだ。そうしたら、どうも違っていたみたいで、ぼくの兄としての親切を違うものだと勘違いしてしまったように」

ばかだよな、ほんと、何やってんだろうな。

「つまり、ぼくが出しゃばらずに、冬が結婚するからって相手の女性に接触しなければ……寧ろ何もしなければ、二人は上手くいったかもしれないってことなんだ。猛烈に自己嫌悪だよ。冬に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。丁度その頃に他県での仕事の誘いがあったんで、ぼくはそこでお世話になることになって」

仕事の名のもとに、ぼくは冬から逃げたんだ。冬に合わせる顔なんてなかったよ、と。

「けれど、もうそろそろいいかなと思って。そして帰ってきたら、どこからどう聞いたのか美由紀さんがやってきて」

「もしや、またお兄さんに迫って」

「いやいや、まさか。美由紀さん、聡明な人なんだ。彼女は今夜、ぼくに謝りに来てくれたんだ。自分の迷いのせいで、兄弟の間に溝を作った、と。そのことを後から人づてに聞いてショックだったって。あの頃は、彼女自身の仕事も大変で、そんな時に相談にのってもらえたのが嬉しかったと、だから自分のことしか見えず、ぼくたち兄弟がどうなるかなんて思うことはできなかったって。今ではもうご結婚されて、子どももいるそうだよ。……うん、そうなんだな。うん」

傾国の美女は、高原兄弟の王国を傾けてしまったんだ。二人だけなのに、二人しかないのに。

「今日子ちゃん、冬に兄がいるって驚いていたじゃない。そんなの聞いたこともないって。それは、ぼくが冬に口止めしていたから。美由紀さんのことで、人の想いなんてちょっとした針の触れ具合で何がどうなるかわかったもんじゃないって身にしてみて。それに、それ以外の何かの理由でも、二度と、ぼくのこと、冬の兄のことで、あいつの幸せを壊すようなことはしたくないって」

もし、自分がした何かで、姉の結婚が壊れたとしたら。

私は高原兄の言葉を、自分のことに置き換えて、ぞっとした。

そして、姉と何年もそのことで離れて暮らさないといけないと思うと、耐えられないと思った。

「でもね、さっき美由紀さんと話して、そして今までのことを思い出してさ」

冬の奴、あんだだけぼくのことを口止めたのに、連れて来たんだよね、未来さんを。

「え、お姉ちゃんと今回の事以前に会ったことあるの？」

知らなかった事实に、またまた驚く。

「うん、宮城先生に会いに東京に出てきたとき、冬とご飯を食べるようになって。ぼくが泊まっているホテルに二人で来たんだ」

高原兄は、「あれだけ言ったのに、連れて来るかね。普通」と言っ

て片眉を上げた。
段々と高原兄にいつもの元気が戻ってくるのを感じて、ついほほ笑んでしまった。

「そこで、未来さんと二人になる瞬間があって、ばっちり言われましたよ、ぼくは」

……聞きたいような、聞くのが怖いような。

「姉は、なんと」

「未来さんはね、『私は、面食いです』って」

「……申し訳ございません……」

ああ、姉が、あの砂糖菓子で顔を。

高原兄が笑う。

「でもね、凄いね、未来さん。ぼくね、未来さんのその一言で、なんていうか重い鎖から解き放たれたような気がしたんだ。ああ、大丈夫なんだ、この二人はって。そう思ったんで、ぼくもさ今考えると随分変なんだけど、その未来さんの言葉に『ありがとう』なんて返しちゃってさ」

——「私は、面食いです」

——「ありがとう」

知らない人が聞いたら、なんだろうと思うような会話だ。

「お姉ちゃん、そういうところ、あるから」

姉の一言が、高原兄と高原さんを再び繋ぐことになったかと思うと、とても誇らし気持ちになった。

高原王国復興の陰に、砂糖菓子美女あり！ お姉ちゃん、偉いっ！

「美由紀さんだって、ぼくに会いに来るの、勇気いったらろうなっで。そう思うとさ、女の人って凄いなあ。いやあ、ぼくもがんばらないとなあ、って」春から新しい学校で先生だしね、と高原兄は言った。

先生、か。

ふと、グラウンドで見た高原兄を思い出した。

そして、その姿を見て……淋しく、そう、淋しくなってしまった自分も。

姉が帰ってきたら、ともかく高原兄はここを出ていくだろう。

「高原先生」には、それこそ毎日会うことになるかもしれないけれど、「高原兄」に会えるのは、盆暮れ正月。

高原兄の時計は動きだし、そしてその時計は私と同じ時は刻まな
い。

「あれ。今日子ちゃん、大丈夫？」

落ち込んでしまったことを悟れないように、「大丈夫、大丈夫」と笑ってみせる。

弟の婚約者の妹なんて、普通に考えたら問題外だ。

しかも、同じ学校に勤務なわけだし。

高原兄にしてみたら、私は生徒と変わらないんだろうし。

そうだ。だから「親戚」って答えたんだ。

私はあの時「親戚」の言葉に親しいものを感じたけれど、逆に言えばそれ以上は親しくならない関係でもあるってことだから。

ああ、だめ。涙が出るかも。

「あ、今日子ちゃん。ほら、髪の毛食べてる」

数本の髪が、口元に来ていたようで、高原兄が右手の親指で髪の毛を払ってくれた。

髪が長いと、そういったことってあるから。

「ありが」とう、と言おうとしたら、そのまま——そのまま高原兄の他の指も頬に寄せられた。

私の左側の頬は、高原兄の右手に包まれたのだ。

自分の掌とは、違う感覚。

大きくて、少し硬い。

高原兄の親指は、私の顔を上を滑るとそのまま眉をすつと撫でた。

ぞくりと鳥肌が立った。

思わず視線をそらしてしまう。

こっちは、もう、心臓が飛び出さんばかりにどきどきしているけれど、きつと例によってそれは私だけ。

大人な高原兄にとっては、日常茶飯事なことかもしれない。

日常茶飯事。

あ、嫌だ。

こんなこと、誰かとの日常茶飯事なんかにしてほしくない。

ふっと視線を上げると、高原兄の顔をまともに見てしまった。

心臓が、どきんと跳ねた。

男の人に対しても、色っぽいっていう表現は使ってもいいものなのでしょうか。

自分の経験不足が、今は恨めしい。

高原兄の指は、下に降りてくると、今度は私の頬を丸くするりと撫でた。

「顔、洗った？」

擦れたような、高原兄の声。

「か、かお。も、もちろん」

え、お肌のチェックってこと？ そんなわけないだろう、という自分への突っ込みの声も弱々しい。

「肌。赤ちゃんみたいだね」

「あ、そうかな。特別なにも」

うそうそ、いろいろしています。姉のレクチャーの元。

すると、高原兄の頬にあった指が開いたままの私の唇をそつとなぞり、そしてその下の顎を、唇とは逆に弧を描くようにゆっくりと撫でた。

ガクリ、と私はそのまま後ろにあるタオルが入っている棚に、もたれかかってしまった。

膝と腰の力が抜けた。

高原兄は棚と私を挟むように立ち、そのまま両手を棚に伸ばした。

私は、完全に棚と高原兄のサンドイッチの具状態。

もしかして、もしかすると、もしかしちゃうわけ？
あまりの展開に、私は思わず目を瞑ってしまった。

すると、ぽふっ、という脱力系の感触が頭の上にした。
はっと、手を頭上にあてると、なんとタオルが置いてあった。

高原兄はそんな私の様子を見て、「温泉」と言ってほほ笑んだ。

温泉。

頭にタオル載せて、いい湯だってこと？

一言も声を出すことができず、ただただ高原兄をみつめる私に、
「好きな子は大切にしないとね」と高原兄が言った。

えっ、好きな子？

もたれかかった棚から体を離し、動き出そうとした私に「ほら、
しっかり髪を乾かして」風邪を引くでしょと言うと、高原兄は私の
頭をタオルの上からポンポンとたたき、立ち去った。

黄金林檎は買えましたか

目ざまし替わりの携帯の音を、プチッと消す。

……寝不足。

眠れるわけがないでしょう。

——好きな子は大切にしないとね。

いやいや、あの言葉に騙されてはいけない。

あんな、人の頭にタオルを載せておいて言った台詞だ。
真剣な意味のはずない。

でも、万が一そうだった意味だったら……。

昨晚からの、ループな思考が再び始まってしまった。

「今日子、帰りにメールを入れるのを忘れないでね」

母からの声に、はいはいと返事をしながら、門扉の前に母と並んで立っている高原兄をちらりと見る。

こっちは、寝不足だっていうのに、すっきりした顔をしちゃってさ。

不公平だわ。

すると、私たちの目の前を近所のおじさまが、走っているのか歩いているのか判断しかねる微妙な速さで通り過ぎながら、「今日子ちゃん、奥さん、おお婿殿まで、おはようさん」と挨拶をしていた。

婿殿。

そういえば、その話も立ち消えになっていたし。

ああ、もうなんなの。もうっ！

もやもやとした頭を抱えつつ、私はバス停までの道を早足で前のめりになりながら進んでいった。

仕事で校内のあちこちを歩いていたら、オケ部の楽器の音がしてきた。

そして違う方向からは、演劇部の発声練習も聞こえた。

生徒たちの声や息遣いがあることで、学校が生き生きとしてくるのがわかる。

春休みも終わりに近づいて来た。

日、一日と暖かくなり、そして日が暮れるのも遅くなってきた。

季節がどんどん動いていくのを、肌で感じる。

目覚めの季節が始まるのだ。

帰り道、最寄駅側のキャッシュコーナーでお金を下ろした私は、足取りも軽やかにバス停へと向かった。

バックの中には、家に入れるお金と、「K2」での軍資金が入っていた。

幸いにも姉からの「帰るメール」はないので、「黄金林檎」は三人分。

売り切れだと困るので、今日の昼休みにお店に予約をするという念の入れようだった。

「黄金林檎」をレンジで軽く温めて生クリームを添えて、たつぷりとミルク入った紅茶と一緒に食べるところを想像して、唾を飲み込んだらバスが到着したので、慌てて乗り込んだ。

そして停留所まで来ると、待ちきれないかのようにバスを降り、

そのままの勢いで「K2」の扉を開けた。

「いらっしやいませ」の声とともに、私は甘い匂いにふんわりと包まれた。

軽い達成感を感じつつ、予約の名前を告げると、カウンターにいた店員さんが手際よく用意を شدした。

なるほど、「K2」の名の通り、背の高いすらりとした女性店員さんだった。

思わず私も、ショーウィンドウに映る自分の姿を見て、すっと背中を伸ばした。

背が高いっていいなあ、と思いながら。

さてお会計、というところでバックに入れていた携帯が鳴った。

その時初めて、今日は駅からの「帰るメール」を入れていなかったことに気がついた。

うわ、大変、と思いながら、「すみません、ちょっと電話をしますのです」お会計を待って下さい、という意味を込めて頭を下げながらバックから携帯を取り出した。

そして、他のお客さんの迷惑になると思ったので、携帯を握ったまま店の外に出て話しだした。

「今日子ちゃん、今どこ」

電話の声は高原兄だった。

心配そうな高原兄の声に「やばい」と思いながらも、「あの、実は」とケーキ屋さんにいることを伝えた。

「わかった、直ぐ行く」

高原兄はそれだけ言うと、電話を切った。

この調子じゃ、高原兄からお説教をされるかなあと思いつつ、でもそれも悪くないなあなんて思う私は、どうかしている。

「やばい」と思いながら顔がにやけちゃんだから、始末が悪い。

そんなこんなでお店に戻ると、さっきの「K2」な店員さんとは違う人が会計をしてくれた。

私は、念願の「黄金林檎」を手にすると、高原兄からの防犯ブザーを手に握り、家へと向かった。

電柱についた蛍光灯が、チカチカと今にも消えそうな灯りをともしていた。

そういえば、ああいった電灯ってどこの管轄なんだろう、と思った、その時。

いきなり後ろから抱きつかれた。

ひっ、という声にもならない声が、自分の喉から聞こえた。

「出しなさい。携帯」

女の声がした。

え、携帯？

「持っているんでしょ、出しなさいよ」

女の人だ。

この人が、この人が、犯人？

でも、携帯？

なんで、携帯？

それに、バイクじゃないの？

私はがくがくと震えながら、ともかくその女に言われた通り携帯を出そうしたが、抱きつかれているので上手く動けない。

「う、動けない」

私が絞り出すようにそう言うと、女は私から体を離し、そして突き飛ばした。

ふわっと体が宙に浮いたかと思うと、次の瞬間には私の体は地面とぶつかっていた。

そして、私の体の下でぐしゃりと、「黄金林檎」がつぶれる感触があった。

ああ、と思った時、女は地面に落ちた私のバックを奪うと、そのままそれを逆さにした。

封筒に入ったままの現金や、お財布、化粧ポーチ、それに携帯電話と、どれも私の大事なものが、女の手によってまるでゴミのように地面に転がされた。

私はそれをなす術もなく、ただ見ているだけだった。

女は封筒にもお財布にも手を出さず、真っ直ぐに私の携帯電話を手にした。

そして、「全てはあんたのせいなんだから！ あんたが悪いのよ！ 私に、犯罪なんかさせて！」と叫ぶと、携帯を掴んだまま私の方にやってきた。

やだ！ この人、おかしい！

怖い！ やだ、やだ！

――私は、また何もできないままなの？
はっとした。

私の手には、高原兄からの防犯ブザーがあった。

高原兄！

私は、勢いよく防犯ブザーを押した。

すると、ぱっと大きな光が私の後ろから放たれ、「今日子ちゃん！」という叫び声がした。

次に、光を受けた女めがけて何か物体が飛んでいったかと思うと、それは女の体の真ん中に当たり、ぐしゃりと割れた。

そして、女が受けていた光がいきなり明後日の方向を向いたかと

思うと、大きな笛の音が鳴り、その音に反応したであろうご近所の家々の電気がまるでリレーのように灯っていった。

あちこちの家がざわめきだした。

更に勢いよく、何かが倒れた私の横を風のようには通り過ぎた。

何かじゃない、誰かだ。

—— 高原兄！

体から液体のようなものを垂らして茫然とそのまま棒立ちの女が、走ってきた高原兄によって手際良く取り押さえられた。

あんなに私に対しては威圧的で邪悪だった女だったのに、高原兄に取り押さえられてからは、抵抗もしなかった。

「おお、婿殿！ 婿殿！ 手がらじゃ！」

再び眩しい光とともに、自警団のおじさまが駆け寄ってきては、高原兄を褒めた。

「おじさん、警察を呼んで！」

「もう、ばあさんが連絡済みだよ」

おじさまはそう言うと、今度は私のところにやってきた。

おじさまの手には、大きな懐中電灯があった。

「今日子ちゃん、怖かったのお」

おじさまの声に、緊張の糸が緩んだ私は、ほろりと涙が出た。

続々と集まったご近所のみなさまが、私を労わるように起こしてくれようとした。

犯人を捕まえたままの高原兄からは、「そっちは、大丈夫？」と大声が飛んできた。

今や、私と高原兄の間には、人垣ができていて、お互いあまりよく見えなかったのだ。

私は起きあがりながら「大丈夫！」と自分でも驚くほどの大きな声で返事をする、ペしゃんこになった「黄金林檎」と、コートの

前にべっとりとした生クリームを恨めしい気持ちで見下ろした。

片想いは嫌ですか(前)

嘘みたいな話なのだが、犯人のターゲットはなんと私だったのだ！

正確に言うと、私というか、私の携帯のストラップだったのだが。

高原兄に捕まったことで観念したのか、警察が来るまでの間に、その女は甲高い声でぺらぺらと話し出した。

しかもその女は、さっき「K2」で私に「黄金林檎」を用意してくれた背の高い女性店員だったのだ。

——うちの店の「黄金林檎」の評判をネットで調べたら、たまたま「ゴールドデンアップル」がヒットして。

——今じゃどこでも売ってないって、でも何でも願いが叶うって。

——持っている人が羨ましかった。いろいろと上手くいかないことがあったから。

——そうしたら、バスから降りてきた女の携帯にそのストラップがぶら下がっててさ。

——すぐ、追いかけたかったけど、店長に呼ばれて、行けなくて。

——だから、店のバイクを使って、若い女をかたっぱしから襲った。勿論、ストラップ目的。でも、お金だってあったら貰うけど。

——私は悪くない。悪いのはその女よ。その女が、これみよがしにストラップをぶら下げて、私の前を通ったのが悪い。だから、私を犯罪者にしたのはあの女よ。私は悪くないのよ。

犯人の口から出てきた「ゴールデンアップル」の言葉に、驚いた。

そして以前、山下さんから聞いていた話を思い出し、犯罪にまで繋がってしまった恐ろしさを感じた。

……あの人、これが「本物」じゃないって知ったらどうするんだろう。

そう考えると、なんでこんなことが起きてしまうんだろうと、やりきれない気持ちになった。

私がそんなことを思っている間、犯人はずっと、「私は悪くない」「悪いのはその女よ」を繰り返していた。

警察が来るまで犯人を押さえていた高原兄は、女を引き渡すところすぐに私のところに来て、そのままぎゅっと抱きしめてきた。

おじさまやおばさまの、「おお!」という声が上がった。

子どもたちの「ドラマみたい」という声や、「ラブラブやあ」という声も聞こえた。

いつもなら、こんなことは照れてしまい絶対に出来ない私だけど、今は違った。

今は、この時は、特別な時間だと思ったから。

「ありがとう」

高原兄に抱きしめられながら、そう言う。

「助けてに来てくれて」

思い出すと、また涙が出てきた。

「そんなこと」高原兄はそう言うのと、「間に合ってよかった」と言った。

高原兄は少し体を離すと、まじまじとまるで存在を確かめるかのように私の顔を見てきた。

私は、えへへ、と言いながら目に溜まった涙を指でぬぐった。

「……今日子ちゃん」微かな声で、高原兄は私の名を呼んだ。

聞いているだけで切なくなるような高原兄の声に、私は「はい」と答えると、彼の服の袖を命綱のようにぎゅっと掴んだ。

ふと、高原兄の首から下がっている警笛が目に入った。

「タイタニック」

警笛を見た時から、ずっと言いたかった映画の題名を言う。

警笛のお陰で、ヒロインは助かったのだ。

その言葉に高原兄は少しだけ笑うと、今度はふんわりと私を抱きしめ、「今日子ちゃん、今度一緒に映画に行こうね」と言った。

私は首をぎゅんぎゅん振って、そのまま高原兄の胸に顔をうずめた。

そのあと、警察に話を訊かれた。

終わったあと、そういえば、夕飯も食べていないことに気づき、途端にお腹が空いてきた。

すると、空いただけでなく、お腹もぐうと鳴り……。

「今日子ちゃんのお腹は正直だね」

高原兄はそう言って笑うと、「ラーメンでも食べて帰ろうか」と言った。

母に、夕飯を高原兄と食べて帰ることをメールした。

母には既に電話で、事件の顛末をわかる範囲で伝えていた。

まだ仕事場にいた母は、私の話を聞くなり絶句してしまったが、高原兄の上手いフォローでなんとか安心したようだった。

「今日子が無事でよかった」

いつかと同じ台詞を母は言った。

そしてその言葉に、私も心から頷いたのだった。

片想いは嫌ですか（後）

昼間と違い、ラーメン屋さんにいるのは男の人ばかりだった。

こんな時間にラーメン屋さんに来るのは初めてで、場違いだなあ
と思いつつもわくわくもした。

混んでいたため、私たちはカウンターに座った。

メニューが店員さんから高原兄に渡され、高原兄は私にそれを渡
してきた。

開いて一緒に覗きこむ。

「ぼくは、ワンタン麺に餃子。あ、餃子は今日子ちゃんも食べるで
しょ」と高原兄は言った。

「ワンタン麺と餃子って、かぶりません」と私が訊くと、「好きな
んだからいいの」と高原兄は答えた。

その高原兄の好きという言葉について反応してしまう。

そうよね、私への好きも、せいぜいワンタン麺や餃子と同じレベ
ルよね、と。

「私は醤油ラーメンで」

メニューをぱたりと閉じて、高原兄に告げる。

ふと、視線を感じて横を見ると、高原兄がにこにこしながら私の
顔を見ていた。

わぁ、どうしよう。

高原兄の目に映る自分の顔が、ゆらゆらと滲んでくるのがわかっ
た。

よしよしと高原兄が私の頭を撫でてきた。

そうだね、高原兄にとって、私は仔犬だもんね。

「うー。お年頃の娘なのに、鼻水が出る」

ポケットからティッシュを出して、ぶんと鼻をかむ。

色気ゼロ。

高原兄が店員さんに注文する声がした。

とんでもないことがあった夜のに、なのに私の心はいつになく穏やかだった。

——好き。

そう。私は、高原兄がすっごく好きだ。

注文の品が来るまで、高原兄がおしぼりであひるを作りだした。

「実はこういうことが、『先生』にとって大事なスキルなんだよね」とか言って。

それを私は隣で、くすくすと笑いながら見ていた。

ほわっと湯気を立てながら、私たちの前にラーメンとワンタン麺と餃子が置かれた。

高原兄は、レンジでワンタンを器用にすくうと、私のラーメンの中に入れてきた。

「あ、デザートが来た」と私が言うと、「今日のデザートは白菜じゃなくて、ワンタンかぁ」と高原兄は言った後、何を思ったか箸を置いた。

「今日子ちゃんが買った、りんごのケーキ」

「黄金林檎」のことだ。

「店長さんが、今度たっくさん持ってきてくれるってさ」

「え？」

そういえば、犯人が勤めていた「K2」の店長さんも、遅れてだけれどあの場に駆け付けたっけ。

「……そっか。だったら、お姉ちゃんや高原さんにも食べてもらえらね」

そう言うと私はラーメンのスープを一口飲んだ。

「あ、おいしい」私のつぶやきは、たまたま私たちが座るカウン

ターの側にいた、ラーメン屋さんのお兄さん店長に聞こえたようで、にこりとほほ笑まれた。

「……今日子ちゃんさ、以前ぼくが言ったこと覚えてるかな」

高原兄がぼざりと言う。

「ん。言ったこと？」

あまりに沢山のことを言われていいるので、高原兄が一体何を指すのかわからなかった。

「……カルシウムのこととか？」

食事絡みでのことといえば、カルシウムしか思いつかなかった。すると高原兄はわざとらしくため息をつき、「今度は、ぼくがカルシウムが必要だなあ」なんて言ってワンタン麺を食べだした。

そして、「確かに、おいしい」と言って、若き店長さんを喜ばせていた。

夜道を二人で歩きながら、また取りとめのない話をした。

まるで、この夜が二人で過ごす最後ののように、次から次へと私は話した。

途中、コンビニがあり、やたらと高原兄が「今日子ちゃん、何か欲しいお菓子はな」と訊いてきたのだけど、私は今はもうお腹は一杯で、コンビニに寄るよりもおしゃべりの方がよかったので遠慮をすると、心なしかがっかりとした顔をされた。

高原兄こそ、何か食べたいお菓子があつたんだろうか。

高原兄は、少し遠回りにはなるものの、さっきの現場を通らないルートで歩いてくれた。

そういった高原兄の相手を思う優しさに触れ、私もそういう人になりたいと思った。

そして、私は一体何をそんなにいじけたり、悲観的になってしまったんだろうとも思った。

高原兄が学校だと自分が知らない「先生」になって淋しいとか、

私のことを仔犬扱いをしてくるとか、その「好き」さえもワンタン麺と同じレベルなのだ、とか。

—— 犯人の女の姿が浮かんだ。

自分の望みを叶えたいと、ストラップを欲しがる姿を。

私も、同じではないか。

いじけたり悲観的になる気持ちの裏には、高原兄に振り向いて欲しいという気持ちがあつたから。

—— 報われない。

そう。私は、報われたかったのだ。

自分が想うなら、相手にも —— 高原兄にも、同じくらいの想いを直ぐに返して欲しいと思ったのだ。

誰しもそんな思いは抱くだろう。

そう思う気持ちは、否定できない。

欲しい、欲しいと願う気持ち。

けれど、それが報われないからといって、悲しんだりいじけたり、まして誰かを攻撃をするということは、別なんじゃないかって。

ずっと心が凪いできた。

片想いを楽しもう。

うん。

それが、私の答えだ。

「それにしても、一口でいいから食べてみたかったなあ」と高原兄の声が聞こえた。

「え、何が？」と訊くと、「卵」と高原兄は言った。

「犯人にぶつけたあの卵、一個五十円はするんだって。ぼくが、今日子ちゃんを迎えに行こうと家を出た時、お隣の奥さんからおすそわけで貰って」

そうなのだ。

高原兄が走りながら犯人にぶつけた品は、生卵だったのだ。

全部で六ついただいた卵は、一つは犯人の胸に、そして残りの五つは地面へと着地……というか落下したため（高原兄は走りながら卵が入った袋を放りだしたので）、結局は私たちの口に入ることは無くなってしまった。

日頃、一パック十個入りを百円で買っていたので、一個五十円の卵は、確かに非常に気になるところだった。

ついでに言うと、犯人を明るく照らした大きな懐中電灯も、その時おばさんが貸してくれたものらしい。

電柱についた蛍光灯で、点きの悪い箇所があるから念のためにと。

つまり、影の殊勲賞はお隣のおばさんなのだ。

「卵なんていうから、オムライスが食べたくなってきた」と私が言うのと、「だったら、今度作るから食べにおいでよ」と高原兄は言った。

――今度作るから食べにおいでよ。

今度作るよ、では、もうない。

「そうだね」

その言葉の意味に気がつかない振りで、そう答える。

そして、本当にこの夜が、こうして高原兄と過ごす最後のものになったのだった。

謎は解けましたか（前）

携帯の目ざまし時刻よりも前に、ぱちりと目が覚める。

そのやけによい目覚めに、自分でも驚いた。

カーテンを開けて外を見ると、雲一つない青空だった。

全てが上手くいく、そんな日のはじまりだと思えた。

――が。

母を仕事に送り出し、おじさまがたからの冷やかしを浴びながらのウォーキングも済ませ、シャワーも浴び、服も着替えて食堂に行くと、驚いたことに仕事に行ったはずの母が戻ってきていた。

そして高原兄と何やら話しこんでいた。

「あれ、お母さん、どうして」 それに、一体何の話をしていたの、と言う思いで二人を見た。

「実はね、今日子ちゃん」

母が話し出すと同時に、「ただいま！」と元気な声が玄関からした。

「うそつ、お姉ちゃんだ」

姉だった。

今週中には帰るとの言葉通り、本当に帰って来たのだ。

はじかれたように玄関に向おうとする私の腕を、高原兄がぐっと掴んだ。

そして、そんな高原兄にぺこりと頭を下げて母が私の前を歩きだした。

「え、なに」

明らかにおかしい二人の様子に、私は不安になった。

先に玄関に向った母のあとを、高原兄に連行されるように私は歩

きでした。

なんだろう、何が起きるんだろう。

私が玄関に近づくと、「今日子」と姉が私の名を呼んだ。久しぶりの姉の元気そうな顔に、私はほっとした。

その姉の後ろには、高原さんがいた。

高原さんは高原さんで、相変わらず隙がなかったいいけれど、そこにはもう一人いた。

お姉ちゃんの横に、知らない男の人。

「今日子ちゃんか」

その男の人が、真っ直ぐに私を見るとそう呼んだ。

その一言で、私の世界が、足元がぐにやりと歪んだ。

「大丈夫だから」

よろける私を、高原兄が私を支えた。

—— 大丈夫だから？

そう言った高原兄を見上げる。

ううん、大丈夫じゃない。

大丈夫なんかじゃない！

—— 万が一あの男がここに戻ってきたときに追い出せるようにだよ。

私の中で、祖母の言葉がよみがえった。

食堂では収まりきらない人数だったので、みなで高原兄の使う和室に行くことにした。

高原さんが、机をセツトしたり、座布団を出したりしてくれた。
高原兄はお茶をいれ、皆に配りだした。

高原兄弟は何もできないでいる私たちに代わり、そういった雑多なことを引き受けてくれたのだ。

姉とその男の人が並んで座り、その向い側に私と母が座った。

高原兄弟は入り口近くの狭い席に、高原さんが姉の右斜め横に、そして高原兄は私の左斜め横にと、並んで座った。

「いただきます」

高原さんがお茶を飲むと、それに習うように姉も高原兄も飲みだした。

母も黙ってお茶を飲んだが、私ともう一人の男の人だけは微動だにしなかった。

「今日子ちゃん」

そんな中、口火を切ったのは、まさかの高原兄だった。

なんで高原兄が、と私がとても驚いた顔をしたのだろう。

高原兄は、一瞬話すのを躊躇^{ためら}う顔をした。

「……今日子ちゃん、今回のことの全てのはじまりは、ぼくなんだ」

—— 今回のことの全てのはじまり

一体、高原兄は、何を言い出すのだろうとの思いで、私は高原兄を見た。

「全て、って。……お姉ちゃんの駆け落ちから？」

そこからもう始まっていたの？ と声にならない思いで高原兄を見つめた。

「春匡さん、それは——」と姉の言葉を遮るように、「そうだよ」と高原兄は言った。

その言葉に、私は宙に放り出されたような気持ちになった。

私は、その場にいるみな顔をぐるりと見た。

つまり、何も知らないのは、私だけってことなのだろうか。
私は、自分が知らない間に、高原兄が描いた設計図の中に入れられていたの？

膝の上に載せていた手が震えてくる。

歯も、がくがくとしてきた。

このままこの場から、逃げてしまいたいと思った。

「違うから、今日子。今日子だけじゃないから」

思わず、といった感じで姉が口を挟む。

「今日子だけじゃない。お母さんだってよくわかってない」

姉の意外な言葉に母を見ると、母も確かに戸惑ったような顔をしていた。

「お母さんも、知らなかったの？」

すると母は大きくかぶりを振り、「私が悪いんだから」と言った。

「もう、その話はあとで訊くとして」

姉が高原兄に頭を下げ、話の続きを促すような仕草をした。

「うん、ぼくが以前いたところでね、評判のレストランがあった」

私の心の揺れとは裏腹に、高原兄の声は憎たらしいほど静かだ。

「そこはね、東京でお店をやっていた人が、セミリタイアのつもりでその地で開いたら、思いがけず繁盛してしまったお店でね。料理もうまけりゃ、居心地もよくて」

高原兄のいきつけのレストランの話なんて、今は聞きたくもなかった。関係ないじゃない、と。

「そこでね、今日子ちゃん。また、うまい地ビールを出していき。ぼくは、すっかりファンになって」

地ビール。

その単語に、記憶の中の何かがひっかかった。

「それはね、今年に入ってから。うん、春からの東京での学校も決まった頃に、そのレストランに行った時のことなんだ。ぼくの好きな地ビールを作っている人が店に来ていて、店主に紹介してもらってね。それが、水流ノ木さん^{つるのき}だった」

高原兄の言葉を聞き、水流ノ木さん―― 私たち母子と同じ名字の男の人をちらりと見た。

「ぼくは驚いたよ。その少し前に冬匡の婚約者だと紹介され一緒に食事をした未来さんと同じ名字だったから」

誰かのごくりと唾を飲む音が聞こえた。

「その時も、散々珍しい名字だねえ、なんて話をしていたから。：そこでね、未来さんと食事をした時にね、彼女からご家族の話も聞いていたんだ。お母さんのこと、今日子ちゃんのこと、亡くなったおばあさんのこと。そして、幼い時に、ある日突然いなくなってしまったお父さんの話も」

高原兄の言葉に、その場がしんと静まった。

私は高原兄の口から出た、「突然いなくなった」との言葉に、動揺した。

私にしてみたら「最初からいない父」だけれど、姉にしたら「ある日突然いなくなった父」となるんだと。

それは、「奪われた」というか、「引き離された」というか、ともかく残酷な響きに聞こえたから。

「未来さんは、お父さんに会いたいと言っていた。でも、どこにいるのかわからない、と」

高原兄の言葉に、その男の人が項垂れた。

「そして言ったんだ。自分の為だけじゃなくて、妹の為にも父親に会いたいんだと」

私の為？

姉の言葉の意味が分からない。

「水流ノ木さんから名刺をいただき、それが確かに未来さんと同じ名字だと確認したあと、ぼくは頭の中で計算をしたんだ。ぼくの知人で同じ名字の女性がいることを伝えるか、このまま黙って何も言わないか」

姉が、お茶を飲んだ。

その姉の細い指を、見るとはなしに見ていた。

そして薬指に結婚指輪がないのを見て、ああ、駆け落ちは嘘なんだ、と思った。

「水流ノ木さんに言ったところで、必ずしも未来さんと関係がある人だというわけではないし、という思いと、万が一水流ノ木さんが未来さんが探している人であれば、これから大変なことが起こるだろうというのは、火を見るよりも明らかで。水流ノ木さんと雑談を続けながらも、そればかり考えていた。というのも、ぼくは以前にも余計なことをして、弟に迷惑をかけたことがあったから。もうあんな思いは二度と嫌だったから」

美由紀さんのことだ。

「だから、ぼくは考えた挙句、言わないでおこうと思った。なかったことにして、この場をやり過ごしてしまえって。……そうしようと思った時、ぼくたちの席の側を通った小さな女の子がいてね。その子のお母さんがその子を『みきちゃん』って呼んだんだ。そうしたら水流ノ木さん、ぱっとその母子を振り返ったんだ。それを見て、ああ、水流ノ木さんがこんなことをするのは、これが初めてのことじゃないんだなって。……理屈じゃなくて、そう思ったんだ」

姉がもうそんなに小さいはずはないのに、それでもこの人は振り向かずにはいられなかったということなんだろうか。

「そして、思い出したんだ。未来さんのお陰で、ぼくは再び冬とわだかまりなく会えるようになったことを。家族との縁を結びなおしてくれたってことを。だったら、今度はぼくが、彼女のために何ができるだろうと。だからぼくは水流ノ木さんに話す方向でいうこと思った」

——だから、全てののはじまりは、ぼくなんだよ。

そんな高原兄の声が、聞こえるようだった。

謎は解けましたか（中）

「ただ、水流ノ木さんが、どんな方なのかわからなかったので、話すにしても様子をみないといけないと思った。ぼくは、水流ノ木さんご夫婦が別れた理由を知らないわけだし、何か——こういつては何ですが、危ない事情があったかもしれないわけだし。そうなる迂闊には水流ノ木さんにこちらの情報は流せないしね」

隣で高原さんが大きく頷いた。

外見的には似たところがあまりない二人なのに、考えかたは似ているということだろうか。

「様子を見てと言っても、その時点で既にぼくの滞在日数のカウントダウンは始まっていたわけだから、ちょっと焦ったけれど。でも、純粋な好奇心としてビール作りにも興味があったので、ぼくはそういった口実を作っては水流ノ木さんと過ごすようになったんだ」

ビール工場に行ったり、仕事仲間の人たちにも会ったよ、と。

「そしてその時点で、ようやく弟に相談をした。今、こんな状況だけれどどうするかって。話は弟から未来さんにいき、未来さんからぼく、ぼくの目から見て水流ノ木さんが話しても大丈夫な人物だと思っただけでこちらのことを伝えてくれ、と。そしてその時、水流ノ木さんがいなくなる前にあった妹さんの——今日子ちゃんの事故の話と、その後おばあさんと同居になった話を聞いた」

ごめんね、今日子ちゃん、と高原兄は言った。

「そんなわけで、ぼくが水流ノ木さんに未来さんのことを打ち明けたのは、もう明後日には東京に戻るって、そんな日だった」

ギリギリだよ、と高原兄が苦笑いをした。

「——高原さんから」

乾いた擦れたような声で、その人が話し出す。

「高原さんから、弟さんの結婚相手がぼくと同じ名字でそして下の名前は未来だと訊いた時、そして未来ちゃんがぼくに彼女の存在を話してもいいと言ったと聞いた時、恥ずかしいけれど、泣いてしまった」

お父さん、と姉がその人の背中をさすった。

「ぼくは……家を出ておきながら。それなのに、離れているのに、ぼくの中では、ずっと、未来ちゃんもそして今日子ちゃんも家族だったから」

離れていても、家族。

その人は、そう言った。

「はいはい、ええと。そこからは私から話すのが分かりやすいのかな」

姉が高原兄のことを見てそう言った。

高原兄は、姉の言葉に頷いた。

「すぐく長い話なんで、あれこれ脱線したら注意してね」
久しぶりの姉の口調に、ちょっと安心する。

「あれは、いつだったかなあ。今日子が高校を卒業するかしないかの時かな」

姉が私を優しい目で見てきた。

「この部屋、前はおばあちゃんが使っていたでしょ。それでね、この前を通った時のことよ。おばあちゃんの話し声が聞こえて」

ああ、姉は訊いていたんだ、と思った。

「おばあちゃんが今日子にしている話を聞いて。今日子の怪我と、両親の離婚を関係付けて話しているのを聞いて、ああ、そういうことだったんだと、謎が解けたの。つまり、おばあちゃんとしてのストーリーはそういうことだったんだって」

おばあちゃんとしてのストーリー。

そう言う姉は、ちょっと失礼と言ってお茶を飲んだ。

「……で。おばあちゃんとしてのストーリーって言ったのは、だって私が知っているストーリーとは違ったんだもん、それ。っていうのも、何分私も小さかったし、リアルに覚えているっていうよりも、あとからお母さんと話して作った記憶なのかなあとも思ったから。だから、もしかしたら、おばあちゃんの言うことが正しいのかな、と思ったりもして」

悩んだわ、と姉が言う。

「ということは、お母さんに訊いても、私が知っていることしか返ってこないってことでしょ。それにね、その話の最後は必ず『ごめんね、お母さんのせいで』ってなるわけで。はっきりいって、何がお母さんのせいなのか、わからなかったんだけど、ともかくこの話をすると、お母さんを悲しませるんだって思っただけ。そうなるって、今日子の怪我以上の話は、つまりお父さんはどうなったのって話は訊けなくなっちゃってね。まあ、お父さんのことはともかく、今日子の怪我のことについて、あの場で何があったのかを、改めて誰に訊こうかと思った時、ああ、そうだ、お隣のおばさんに訊こうって思っただけ」

「え、お隣の？　なんでお隣のおばさんが」

「あら。だって、今日子が怪我した時に、あの場にいたのがお隣のおばさんなんだもん」

お隣のおばさん？

あのいつも挨拶してくれる。

どこもかしこも丸い。

一個五十円の卵をくれた。

影の殊勲賞の。

——佳子の留守中だというに、あの男は家に女を呼んだんだ。

おばあちゃんは、そう言った。

つまり、おばあちゃんが言っていた「女」っていうのは、お隣のお婆さんのこと？

おばあちゃんの言い方から、私はその「女」に、なんというか浮気相手とかそういったニュアンスを感じていたけれど……。

そう考えているうちにも、姉の話は続く。

「だから、私は訊いたのよ。今日子が怪我をした時の話をお婆さんにね。お婆さん、すごく良く覚えてて、それは私と同じだった。つまり、救急車を呼んだもの、今日子の面倒をみたのも、全部お隣のお婆さんだってこと。おばあちゃんは、あとから、お母さんと私が病院に駆け付けた時に同時に病院に来たってこと」

しかも、お隣のお婆さんに事故の事を聞いてよ。

「おばあちゃんも、よくもそんなでたらめなこと言うわよねえ」と、姉がため息をついた。

「いや。お義母さんがどんなことを今日子ちゃんに伝えようと、ぼくが悪いのには変わりはないんだから。ぼくが今日子ちゃんと一緒に昼寝をしていて、今日子ちゃんがいはいしたことに気がつかなかったんだから」

おまけに縁側の窓を開けっ放しにしている、とその人は言う、と、縁側を見た。

その表情に衝撃を感じた。

忘れていないんだ、と思った。

この人の中では、それはまだ過去とは言えないものなのだ、と。

「今日子ちゃんの泣き声で、初めて何が起きたか知って。そこに、丁度お隣の奥さんが回覧板を持ってきて。助けてくれて。ぼくはね、今日子ちゃん。泣いている君を抱っこするしかできなかったんだ。」

娘が怪我をしたというのに、それもぼくの不注意だというのに、全く何の役にも立たなかったんだ」

つまり、私が縁側から落ちたのは、本当。

でも、この人が女の人といたとか、そういったことは嘘？

謎は解けましたか（後）

「お姉ちゃん、そのこと、おばさんに聞いた時点で、どうして教えてくれなかったの」

そうだ、それを知っていたら、少なくとも今よりはいろんなことを素直に受け止められたはずだ。

「うん、そうだよね、今日子。私ね、おばあちゃんが生きている間は、このことは言えないと思った。今日子、おばあちゃん子だったし。私がそれをおばさんに聞いた時は、おばあちゃんの具合もよくなかったし。ずるいよね、いろいろと計算してわざと言わなかったの。それにね、私が言ったことを今日子が信じてくれるか、それも自信がなかった。お隣のおばさんに頼んで話してもらえば今日子は信じたかな。今日子は、おばさんの言うこととおばあちゃんの言うこと、どっちを信用したかな」

姉の懸念は、その通りだと思う。

「だから一番いいのは、お父さんを探して、お父さんから本当の話をしてもらえばいいって思った。私だって、やっぱりお父さんの口から聞きたかったし。特に、そう強く思い始めたのが、今日子が大学で彼と別れた時。その時の様子を聞いた時、あ、この子、男の人の事を信じてないんだってわかって。でも私、お父さんがどこにいるかわからないし。お母さんは、お父さんと連絡を取っている様子は一切ないし、探しようがなくて」

でもね、と姉は言う。

「でも、もし、お父さんを今日子の目の前に連れてきても、それで何ができるかって自信はなかった。おばあちゃんも生きていたし、お母さんだって、お父さんのことをどう思っているのかわからなかったし」

迷いばかりだった、と。

「だから、春匡さんが出会った男の人の話を聞いた時、その人が地ビールを作っているって聞いた時、私、あっと思ったの。それで、急いでキッチンに行って、お母さんの好きな地ビールの産地を見た時、うそでしょ、って」

ああ、地ビール！

母が数年前から嵌っている、地ビールって！

「今日子、ねえ、覚えていてでしょ。その地ビールが何かで賞をとって、お母さんが大騒ぎをしたことを」

「……うん」覚えていてる。

日頃は、少し高いそのビールを惜しむようにしか飲まないのに、その日はやけに沢山開けて飲んだっけ。

母の顔を見ると、いつになく赤くなっている。

「繋がっているって。私たち、繋がっているんだって。お母さんはお父さんの作っているビールをずっと買ってて、それを娘に飲ませているんだって。それを知った時、これはイケルって思ってた」

姉の話は、まるで鮮やかなマジックの種明かしのようにだと思った。

「……お父さんが」

母はそう一言言うと、「水流ノ木さんが」と言い直し、「ビールを作っているのを知ったのは、ほんとうに偶然なの」と続けた。

「うちのお店に置いてあるフリーペーパーがあるでしょ。あれにね、地ビール特集があったの。そしたら、そこに水流ノ木さんが映っている」

フリーペーパーって、あの「全国のおんぱん特集」の？

「水流ノ木さんから、離婚したあとも月々お金を振り込んでいただいていて、それが唯一の繋がりではあったんだけど。逆に言うと、

それだけだったから。あのフリーペーパーで、水流ノ木さんが頑張っているのを知って。水流ノ木さんからのお金、本当に助かったし、今は子どもたちも大きくなって少しは余裕もできたから、だから応援の気持ちもあってビールを頼んで」

そうだ、そういえばあのビールは通販だった。

「うん。はじめて、佳子さんから注文が来たときは驚いた。でも、嬉しかった」

そして、みんなが飲んでくれていると思ったから、頑張れた、とその人は言った。

「あのね、さっきから、本当にいろんな話が出て、みんないろんな気持ちになったと思うけれど、でもね悪いのは私なの。私だけ。家族をばらばらにしてしまったのは私なんだから」

母はそう言う、目の前に座るその人に頭を深く下げた。

「私が、四人家族の家庭を守れなかったの。私たちの早すぎる結婚を良く思っていなかった母に、結局は従ってしまった。あの日、今日子ちゃんが骨折してしまったのも、家族のためにと無理な残業を引きうけて疲れていた水流ノ木さんに、私が今日子をお願いしてしまったからなの。意地をはらずに母の助けを借りて、水流ノ木さんにゆっくり休んでもらえばよかったのに。だから事故が起きて、母にそこを詰められてしまった時には、限界だった。……それに、父が亡くなり一人になってしまった母を切ることも、私にはできなかった。もし、ここで私が母を拒否したら、縁が切れてしまうって思ってしまった」

母は俯いたままだ。

「今になって思うと、それでもやっぱり、私は家族を守らなくちゃいけなかった。でも、できなかった。できなかったの。本当にごめんない」

母は首が折れるんじゃないかって思うほどに、頭を下げてきた。

「お母さん」

顔を上げてよ、と姉が言う。

そんなつもりはなかったのだけれど、私は長いこと息を止めて話に聞き入っていたようで、母の話を聞くと、大きなため息が出た。

そのあと母は、私が姉からメールを受け取る前日に姉から「父親と会っている」というメールを受け取り、はじめて姉のしていることがわかったと言った。

そして私は、姉からの「今週中に帰るメール」を伝えた時の、母の様子を思い出した。

母の宙を見るような目を。

私たち四人は、まるで迷子のようにだと思った。

しかも、どこに帰っていいのか、帰る場所さえわからない迷子だ。

私はどうしていいかわからず、高原兄のことを見た。

高原兄は、さっき私に「大丈夫」と言った時と同じ顔で私を見てきた。

……大丈夫なんかじゃ、全然ない。

すると、隣で姉がずっと背中を伸ばし「私は。私はこれからも、お父さんと連絡をとりますから」、と女王様のように潔い、迷いのない声でそう言った。

「結婚式にも来てもらいたいし、子どもが生まれたら抱っこしてほしいの」

姉のその言葉で、この人が自分たちの生活の中に大きく関わってくるんだという現実が見えてきた。

私は、私は姉のように、思えなかった。

だって、この人のことを許したわけじゃないし。

……許した？

ちょっと待って。

この考えこそが、祖母の言葉の呪縛なんだろうか。

そもそも私が、この人を許すべき離婚の理由などは、なかったのだ。

この人が家を出ていった、という点では非があるかもしれないが、私はその事を問題にはしていなかったから。

女性がいたとかそんな事実はなかったのに、でも長年の思いは消えず、まるで剥がしたシールのあとのように、私の心にその痕跡を残していたのだ……。

人の心って、難しいと思った。

事実とは違いました、ああ、そうですか、とそんな風には処理はできない。

間違った記憶から生まれた感情でもあっても、それは自分の一部となって、深く根を張っていく……。

ぶるりと震えながら、私はまたもやあのひったくり犯の女の姿を思い出していた。

女は、犯罪を犯したのはストラップをこれみよがしに見せびらかしていた私のせいだと言った。

自分は悪くないと。

姉以外の三人は、家族が離れたのを誰かの責任と思おうとしている。

私以外の二人は、それは自分の責任だと。

そして私は、以前はこの男の人の責任だと思い、今は祖母の責任

じゃないかって思っている。

……でも、誰かのせいにして、何かのせいにして、そこから何が生まれるんだろう。

あの犯人を見た時の、犯人がずっと「私は悪くない」を繰り返していた時のやりきれない気持ちを思い出した。

そこに留まっていたのは、前に進めないと。

犯人も、私たちもそこから脱しないと、いつまでもその澱おりの中なのだと。

大丈夫だから、と高原兄は言った。

それは、大丈夫、そこから出ることができるから、という意味なのかもしれないと思った。

それは、高原兄もその澱の中にいたから。

高原さんとのことで、自分を責めることで、その中にいたから。

そして、その言葉を私に言ってくれるということは、私を信じて、私たち家族を信じてくれているからだ。

—— 幸せになりたい。

強烈な思いが私を襲った。

前に進みたい。

誰かのせいにして、過去を嘆くようなことはしたくない。
囚われたくない。

未来を歩きたい、と。

「私も、その、別に、いい」

私の言葉に、みな視線が集まった。

「ビールは、その、おいしいし」

この場で、ビールの味は関係ないだろうと思ったのに、そんな言葉が口から出た。

「でも、そんなすぐに、お姉ちゃんみたいに、その……呼べないかもしれないけど。でも、だからって、嫌いとか、嫌ってことじゃないくて」

そう言うと、私は立ちあがった。

「つまり、お姉ちゃんの見解に賛成ってことで。あとは、もう、よくわからないんで、お母さんと話して下さい」

そして私は和室から出ると、玄関に向い、外へと飛び出した。

そして、ロマンスは…

家を出た瞬間、お金も携帯電話も持っていないことに気がついたけど、構わずにそのまま公園へと向かった。

歩きながら、今の出来事を思い出していた。

姉があの人を連れ、戻ってきた。

離婚の原因は、私が思うような女性関係ではなかった。

あの方は離れていても、私たちのことを思っていた。

母もあの方も、家族が離れたことは、自分の責任だと考えていた。

祖母は、自分で作ったストーリーを私に話していた。

姉はあの人との関係を、築きたいと思っている。

私も心の全てとはいかないけれど、姉の考えには同意できた…。

そして、全てのはじまりは高原兄だった。

高原兄が、お姉ちゃんと会ったこと、そしてあの人に出会ったことで、繋がった話だった。

話を聞いて最初は、高原兄に裏切られた気持ちになった。

けれど話を聞くうちに、高原兄の気持ちの揺らぎも感じた。

こんな役回り、決して、楽ではなかっただろう。

でも、それでも高原兄は引き受けた。

—— 家族が減ることしかなかった。

あの話をしながら、高原兄の頭には、きっと今回のこともあったはず。

「今日子ちゃん」

いきなり名前を呼ばれて、それこそ飛び上がらんばかりに驚いた。

「し、心臓に悪い」

びっくりしたあと高原兄に言う。

「すごい真面目な顔で、ずんずんと歩いていたもんね」

「ずんずんって」

まあ、そうなんだろうけど。

「車に轢かれないかとひやひやしたよ」まあ、運よく車も通らなかつたけどね。

そう言うとき高原兄は、私の隣に来た。

「駆け落ちじゃ、なかったんだね」

あの場でははっきりとは聞けなかったことを、高原兄に訊く。

姉が言っていた「ロマンスがない人生なんて淋しすぎる」とは、

母のことを言っていたのだろうか、と思いながら。

「ああ。……そうだね。駆け落ちじゃなかったね」

駆け落ちなんてかなりインパクトがある言葉だもんね、と高原兄が言った。

「あつ。だから？ だから、お姉ちゃんは」

「駆け落ち」の言葉を隠れ蓑にして。

「うん。旅行に行くなんて言ったら、どこに行くのかって家族は心配するだろうし、そこで行き先を言えば、佳子さんに悟られるだろうからって」

「……でも、なんでお母さんにまで内緒に」

「うん。そうだよ。まあ、……未来さんは、絶対にお父さんを連れて来るって言っていたけど、でもやはり自信はなかったんだろね」

ああ、そうか。

姉が行ったからといって、必ずしもあの人がうちに来るってわけ

ではなかったのだ。

もし、ダメだった時には「駆け落ち騒動」で済まそうと思ったのかな。

「あ、でも。お母さんに連絡したって」

「ああ、うん。それは未来さんなりにいけそうな感触を得たんだろうね」

それにしても、そのメールをしたあとも、なかなか姉は帰って来なかった。

そのことを言うと、「水流ノ木さんにしても、未来さんに会えた嬉しさと、東京の今日子ちゃんたちに会いに行くのでは、ハードルの高さは全然違ったと思うしね」と高原兄からの言葉が返ってきた。

ああ、そうか、と思った。

あの玄関に姉と高原さんとあの人を立てている姿というのは、既にいろんなことを乗り越えたあとのものだったのだと。

そして、隣を歩く高原兄は、全てを知りながら私たちとともにいた。

「あの、その。……ありがとう」

私がそう言うと、高原兄は「え」と言った。

「だから、いろいろとっ。今回のこと」もごもごと語尾を濁す。

他にも言いたいことはあるけれど、でも一番の気持ちは、その言葉だから。

「……ぼく、てっきり、怒られるかと思った」

高原兄が言う。

「私に？」

そう言うと隣で高原兄は俯きふふつと笑い、「今日子ちゃんは、凄いいね」と言った。

「凄いつて、どういう意味ですか」

そう私が訊くと、「いや、大人だなあと行って」意外とね、案外とね、と高原兄は余計な二言を付け加えた。

余計なお世話ですよ、と頬を膨らませた時。

「好きだよ、今日子ちゃん」

高原兄がそう言った。

私の膨らんでいた頬は、しゅうと萎んだ。

全く、この人はなんでも直ぐに好き好きと、好きの言葉の使い方が軽すぎると思った。

私は目を瞑り、徐に大きく一度深呼吸をすると、「あのですね！」と高原兄のことを見た。

高原兄は、俯いたままだった。

てっきりいつものように、こっちをにこにこしながら見ているものだと思ったのに、違った。

途端に、体中の水分という水分が沸騰したかのように熱くなった。

これは、もしかして、もしかするのかもしれない。

本当に、そうなの？

私を？

「わ、わ……」

格好悪いけれど、言葉にできない。

私の声に高原兄がゆっくりと顔を上げた。

高原兄と目が合う。

「わっ、ワンタン麺よりも？」

とんでもない言葉が飛び出す。

「……ワンタン、麺」

高原兄が虚を突かれたような顔をした。

「い、いえ。私は、別にワンタン麺の話をしたいわけではなくて」
本当に、よりによって。

ずっと頭の中に、自分とワンタン麺が同位という思いがあったので、つい口から。

「ワンタン麺かぁ。おいしかったね、あの店の」

高原兄が返す。

ああ、今の一言で完全に、話の流れが恋とは無縁のところに行きましたよ。

自業自得ですよ。

「でも、まあ、今日子ちゃんとワンタン麺、同じといえば同じかな」

そう言う高原兄が笑う。

「どっちも食べたいくらい好き、とか」

「ああ、清々しいこの空気。花粉よ、さらば！」

客観的に見ると決して清々しくなく、今にも雨が降りそうな梅雨のどんよりとした空の下、見て私の鼻呼吸を、と山下さんが言いながら、ふんがふんがしている。

長かった山下さんの花粉症の日々も、とりあず今年の分は終了したということで、お昼休みの生徒たちもないグラウンドにおいて、私たちは葉桜見物をしながらお弁当を広げていたのだ。

「それにしても、最近の今日子ちゃんのお弁当っていったら、充実

しているよね」

そう言うと山下さんは、私の卵焼きをひょいつまんだ。

「お姉さんが、お料理上手なんだっけ？」

あ、桜エビが入っている、と言うと、山下さんはおいしいね、と言った。

私は、えへへ、なんて笑いでごまかしながら、姉が作ったはずもないお弁当を頬張った。

あの日から既に二カ月以上が過ぎていた。

まずは、やはり姉のことだろう。

駆け落ちなんかしていない姉は、本人曰く「誰よりも素敵かつ低予算の結婚式」を遂行するため、あれこれ動いている。

花嫁の妹は花嫁の次に主役であり出席者の男性のドリームとなるのだという、これまた意味不明の姉の意見により、私もあれこれ美的容的アドバイスを受けながら日々過ごすことになった。

そして、なんといっても、最大の事実は……。

「ごめんね、今日子！」

ひったくり事件の話を母から聞いた姉が、私に平謝りしてきたことだ。

なんと、この姉こそが、問題のストラップ「ゴールデンアップル」を製作販売していた張本人だったのだ！

姉からその話を聞いた時、私は顎が外れるかと思うほど、口がぽかんと開いてしまった。

「でもね、作ったのも売ったのも今日子が大学二年の頃なのよね。値段だって、材料費に少し色をつけたくらいだし」と、まさか自分が作ったストラップが伝説めいたものまで作りだし、一人歩きをす

るとは思わなかった、と瞳をうるうるさせながら砂糖菓子のような顔で言った。

つまり、ある意味山下さんの目も犯人の目も正しかったのだ。

その犯人が働いていた「K2」は、しばらく営業を自粛していた。

そして、いよいよ再開という前日、店長さんや従業員さんたちが揃って我が家に「黄金林檎」を持ってきてくれたのだ。

「黄金林檎」は、噂にたがわぬおいしさで、姉に至っては一口食べるたび「材料は何かしら」とぶつくさ言っていた。

可愛い顔して、何をしでかすかわからない姉なので、内心早く高原さんに全権を預けたいと思ってしまう。

「じゃ、いつてきます」

ゴールデンウィークのある日、小さなカバン一つ持った母が、門扉の前に並んで立つ私たちのようにそう言った。

母は、あの人……父のところへ、お嫁に行くことになったのだ。

私も姉も反対はしなかった。

今まで二十年以上、母はずっと「母親として」太陽のように私たちを照らしてくれた。

正直淋しいし、私はまだほんの少し父へのわだかまりはある。

けれど想いあう二人というのは、見ても、それがたとえ自分の両親であってもわかってしまうもので、そんな二人が離れている方が不自然なのだと、私も姉も思ったのだ。

昨晚から私たち三人は、アルバムを広げたり、昔話をしたり、笑ったり泣いたりの大忙しで、目は完全に赤目の兎さんだった。

母は数歩、門扉から離れて歩いたかと思うと振り向き、そして「二人のお母さんでいさせてくれて、ありがとう」と私たちに言った。

その瞬間、私も姉もそして母も、うわっと涙がまた出てしまった。

でも、ここで泣いちゃいけない。

笑って、笑顔で送りださないよ。

「もう、ほらほら、そんな顔で行ったら、お父さんが心配するですよ」

姉が笑う。涙を流しながら。

「そうそう、ほらほら。バスの時間に間に合わないよ」

私も言う。手を振りながら。

そして姉が言う。

「お母さんと、お父さんのロマンスは――」

母は姉の言葉を聞くと、「ばかね」と言って笑い、前を向き、そして歩きだした。

離れていても、家族。

父の言葉が、初めてわかった。

思う気持ちこそが、愛情だから。

「水流ノ木さん」

背中でのその声を受けとめると、いつものように振り向く前に顔を作る。

「はい、なんでしょう。高原先生」

学校の廊下は、生徒や先生が行きかっている。

あちこちでの立ち話しにまぎれて、私たちも言葉を交わす。

「ええと、この間いただいた書類なんですけど」

そう言って、高原兄は私にホチキスで留めた書類束を見せてくる。

書類に貼られたふせんに「ごめん！ 先に帰っていて」とあった。

全くもう、という思いで、私は糸目で高原先生を見る。

だから、そういった連絡ごとはメールでいいんですよ、との思いをこの糸目で伝える。

高原兄といえ、そんな私の気持ちがわかっているのかわかっていないのか、真面目な顔して、何やら難しい懸案でもあるかのように云々と頷いている。

「検討させていただきまっすっ」

私はそう言っていると、ここぞとばかりのお仕事スマイルを高原兄に向けた。

「いじわるだなあ」

高原兄は、少しだけ拗ねたような声を出した。

「……おじゃまします」

初めて使う合鍵で開けた部屋に向い、誰もいないとはわかっていても、そう言ってしまった。

電気をパチパチとつけ、予め指示を受けていた通りの動きをして、夕飯の支度をする。

と、いつでもご飯を炊くくらいなんだけど。

炊飯器をセットした私は、恐る恐るソファに座りながら、あの日、高原兄と気持ちが通じた時のことを思い出していた。

「どっちも食べたいくらい好き、とか」

とんでもないことを言ってきた高原兄に対して、なんて言葉を言えいいのか途方にくれてしまった私に、高原兄は「今日子ちゃん、ぼくのが好き？」と訊いてきた。

そのシンプルな問いに、私は黙って頷いた。

すると高原兄は、「やったね」と言ったのだ。

その嬉しそうな声に、私も初めて同じ気持ちで笑うことができて……。

いつの間にかうとうととしていた私の唇に、そっと温かな体温が触れてきた。

「オムレツ」

重なったままの唇で今日の夕飯のメニューを言うと、「うん、その前に」と高原兄の唇が角度をかえて私に触れてきた。

あの日、姉が母に向けて言った言葉を思い出す。

そして、そのあと小さな声で、姉は私にも言ったのだ。

「今日子ちゃんのロマンスも、これからね」と。

考えてみたら、まともにデートさえしたことない私に、姉曰く高原兄は辛抱強く、ビギナーな付き合いから始めてくれた。

映画に食事にピクニック。

駅で待ち合わせして、帰りは家まで送ってもらって。

そんな、高校生でもないデートから始まって、ようやく合鍵を持つ仲間になった。

会うたびに好きになって、見るたびに気持ちが溢れてくる。

高原春匡という人は、ハンサムでもなければ、影があるわけでもなく、背も高くもなければ低くもない。

太ってもいなければ、痩せてもなく、人に説明するには最も困る風貌をしている。

おまけに、世話焼きで、お小言が多くて、人を仔犬扱いしてくる。

でも、人をとても大事する人だ。

心の痛みを知る人だ。

そして、人の心の強さを信じ、弱さを受け止める人なのだ。

私が、私の心をまるごと預けることができると信じられる人なのだ。

炊飯器の音が鳴る。

その色気のない電子音に、二人で顔を見合わせてくすくすと笑う。

目の前にいる大切な人。

大好き。

そう。

私のロマンスは、これから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5072q/>

ロマンスは、これから

2011年4月28日12時40分発行